

「築地市場」開場物語

—豊洲ブランドの明日をうらなうために—

NPO 法人築地魚市場 銀鱗会

事務局長 福 地 享 子

第 567 号
(第 49 巻 第 3 号)

編 集
発 行

一般財団法人 東京水産振興会

「水産振興」発刊の趣旨

日本漁業は、沿岸、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待しておるので、その為には、それぞれの個別的な分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的な分析の徹底につとめるとともに、その総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層精進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかつてわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処に、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人 東京水産振興会
(題字は井野碩哉元会長)

目次

「築地市場」開場物語

―豊洲ブランドの明日をうらなうために―

第五六七号

第一章・日本橋から築地へ……………	1
プロローグ……………	1
憧れの日本橋魚河岸。そのありのままの姿に愕然……………	2
調査摘録の向こうに築地市場の姿が見えた……………	16
夢追い人、明治官僚の失敗。「魚河岸を移転させよ」……………	17
田口達三と安倍小治郎、小僧上がりの二人のカリスマ……………	20
日本橋魚河岸のターニングポイント、一九二三年……………	23
大震災勃発。日本橋にはついに戻れなかった……………	25
震災直後の慌しさのなか、築地が新市場の地に……………	28
一九二三年二月一日、築地での新たな日が始まる……………	32
早くも波乱含み。松本樓襲撃事件、そして板船疑獄……………	35
第二章・築地中央卸売市場開場……………	37
人影まばらな午後、市場の鼓動にふれる……………	37
すぐれた頭脳を結集。帝都復興事業が始まる……………	44
業者側、猛反対。鉄道ありきの扇形構造……………	46
白亜の大棟館、東洋一の大市场、かううじて開場す……………	51
いまだ水産物部の入場なし。真の開場は道半ば……………	56
中央卸売市場の悲願、市場機構改革の手法とは……………	57
卸売会社は一社か複数か……………	61
世論をまきこみ、割れた中央卸売市場……………	64
市場史最大の汚点、複数派支援者の不買運動……………	66
すべてはあの大きな戦争に。単復問題の向こうに……………	70
エピローグ……………	73

時事余聞 編集後記

福地享子

略歴

▽宮崎県生まれ。日本女子大学卒業後、出版社に勤務。退社後はフリーランスで料理本の編集や女性誌での執筆活動が続ける。一九九八年、たまたま訪ねた築地市場の光景に驚き、二ヶ月後、水産仲卸「濱長」にアルバイト社員として入社。十三年間、店頭で売り子を勤める。現在は、築地市場の水産仲卸が中心となって運営する「NPO法人築地魚市場銀鱗会」の事務局長兼図書部長として資料整理などに追われている。著書に「築地魚河岸猫の手修業」「築地めし」「築地魚河岸寿司タネ手帖」などがある。築地市場開場の経緯についてはこれまで断片的に書いてきたが、豊洲移転を前に、有意義な時間を与えてくれた築地市場への感謝と愛をこめて開場についてまとめた。

「築地市場」開場物語

―豊洲ブランドの明日をうらなうために―

NPO法人築地魚市場 銀鱗会

事務局長 福地 享子

第一章・日本橋から築地へ

プロローグ

東京都中央卸売市場築地市場――。二〇一五年初売りの日、青果物部のセリ場にある電光掲示板の数字は四五〇を告げていた。豊洲新市場竣工のカウントダウンである。一昨年、この掲示板がかかげられた時、仲間と気の早い話だと呆れ、笑いあつた

閉場が決まったモンスター市場に、おつかれさまの言葉に替えて、彼がどのようにして生まれたのか探ってみよう。

のも遠い思い出になった気がする。新市場予定地では急ピッチで工事が進み、開場は二〇一六年一月初旬と知らされている。青果台のカウントダウンがゼロになるのは来年の三月末日だが、それから開場までの数カ月は、早送りの動画みたいに進んでいくのだろう。築地との日々も、そう多くはないことになる。

築地市場が開場したのは、一九三五（昭和十）年。八〇年を経たこのモンスター市場で、私は二〇年近く働いてきた。市場では、仕事が終わってすれ違う時、だれかれとなく「おつかれさま」と声をかけあう。とても気持ちいい習慣だ。そこで私は、閉場が決まった老モンスター市場に、おつかれさまの言葉に替えて、彼がどのようにして生まれたのか探ってみよう。私は、水産物部で働いているので、話は日本橋魚河岸から始めよう。

■ 憧れの日本橋魚河岸。

そのありのままの姿に愕然

一九九八年、ひょんなことから私は築地市場水産物部の仲卸で働くことになった。当初、市場の方たちから水産物部の前身である日本橋魚河岸の繁栄ぶりをよく聞かされたものだ。いわく「鼻の上下、へその下」。鼻の上は眼だから歌舞伎、鼻の下は口で、魚河岸のこと、へその下は吉原。このみつつが千両の金の落ちるところだと。その様



築地市場の象徴、曲線を描いた大屋根。



大屋根の下、混雑する早朝の大通路。

日本橋を描いた歌川広重や葛飾北斎などの魚河岸の姿のみことな描写。さらに、岡本綺堂の「魚河岸の一年」で、日本橋魚河岸への憧れは決定的なものに

子を知るために、私は日本橋を描いた浮世絵を探すことにした。見つけた歌川広重や葛飾北斎など江戸の高名な浮世絵師の手になる魚河岸の姿は、たしかに朝千両の賑わいを見ごとに描写していた。このなかに身を置いて働いたら、どんなにおもしろかう、楽しかろうと、空想にふけたことだった。

さらに、岡本綺堂が一九〇三（明治三十六）年に書いた「魚河岸の一年」で、日本橋魚河岸への憧れは決定的なものとなる。江戸時代のことと交えながら描かれた四季折々の魚河岸。ことに初売りの賑わいはため息をつくほどである。夜目をあざむくほどこに提灯がともし、店頭には鯛や鮓、たこが積み上げられる。押し寄せる客は三万とも五万人とも。獅子舞が踊りこみ、客のなかには少年音楽隊を先頭にたててやってくる者もあり、「いつもの火事場さながらの混雑に初売りは喧嘩も加わったような言語道断の騒ぎ」と、綺堂は記すのである。平成の築地魚河岸の初売りで当時と変わらぬものといえば、年賀の手ぬぐいくらいで、店頭の寒さに震えながら日本橋時代をうらやましく思ったりしていた。

しかし、その後、築地市場内の銀鱗文庫で働くことになり、それまでの日本橋魚河岸のイメージとはかけ離れた姿を知ることとなる。銀鱗文庫は、築地市場の文化団体「NPO法人築地魚市場銀鱗会」が運営する図書室で、日本橋魚河岸関係の資料もかなりのものをそろえている。そのなかのA5版一〇〇ページほどの小冊子を読み、愕然としたのだった。

タイトルは「日本橋魚市場二関スル調査摘録」。出版元は東京市役所商工課で制作年は一九二六（大正十五）年一月（この年の十二月、元号は昭和に変わる）。冊子冒頭、「大正十一年同課刊行の『日本橋魚市場二関スル調査』の摘録」とあり、すなわち一九二三年の関東大震災前、大正一けた時代の日本橋魚河岸の記録である。

この時代について補足しておく、明治維新となり、魚河岸は幕府の庇護による各種の特権は失ったものの、ガリバー市場であることに変わりはなく、また組合をつくり、近代化の歩を進めていた。いっぽうで、移転命令が明治の初めにくだっていたが、こう着状態のままとなっていた。

さて、調査摘録である。前書からして手きびしい。

「同市場ノ現況ハ同業者ノ雑然タル集団」にして「規約ハ有名無実」、「市場組織ノ欠陥、設備ノ不足及ビ運輸ノ不便」などが相まって「取引上多クノ損失ヲ市民並ビニ同業者ニ及ボシテイル」と、存在自体が社会悪だといわんばかりである。

問答無用、以上の理由で移転ありき、として本文へ入っていく。

第一編は、草創期の江戸時代から直近の移転問題にいたるまでの魚河岸の沿革の紹介。実態がわかるのは二編以降で、組織、取扱高および運輸、衛生面にわけて記されている。そのあらましを見ていこう。

●組織について

組合員の数は、九九六名。問屋專業二四名、仲買專業三一〇名、特異なのは問屋と

前書きからして手きびしい「日本橋魚市場二関スル調査摘録」



魚河岸の間屋「佃金商店」。従業員は、小学校を卒業後、住み込みの小僧としてスタートするのが普通だった。



明治末。現在の石の橋ができたばかりの日本橋。左手、橋の向こうが魚河岸。



谷崎潤一郎や小島政二郎もうまいとほめた魚河岸の天ぷら屋「高七」。

当時の仕切りは、問屋から魚荷を預かった仲買人が小売り業者に売ったのち、結果を問屋に持ち寄って決めていたので、問屋も仲買行為をやるのが確実な手段だった

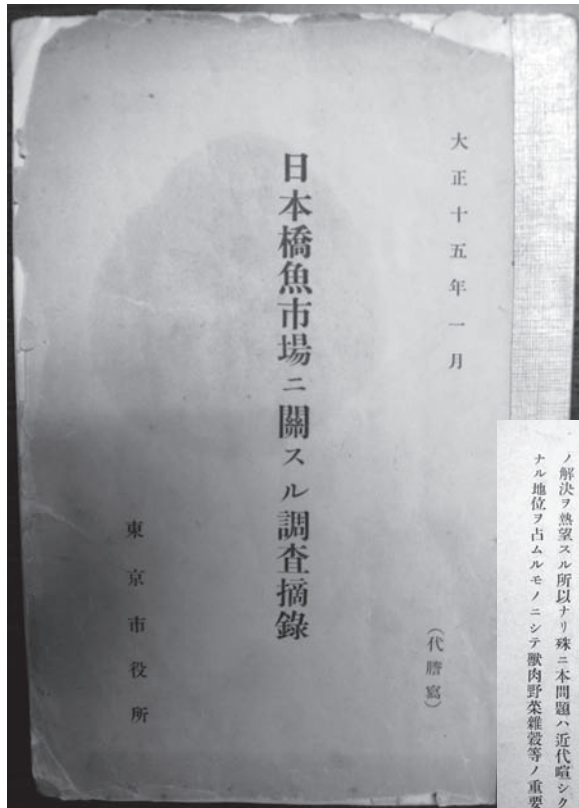
仲買の兼業者がいたことで、その数六六二名。もともと問屋専業であつても仲買行為は公然と行われており、問屋と仲買の境界線はないに等しく、前書通り、「雑然タル集団」という指摘もうなずける。

しかし、業者側にも言い分があつた。当時の仕切り（問屋値段）は、問屋から魚荷を預かった仲買人が小売り業者に売ったのち、結果を問屋に持ち寄って決めた。仲買人は仕事が終わると問屋の店先に集まり、ああでもないこうでもないといそろばんをパチパチやりながら、初めて値段が決まった。しかし、仲買人が言ってくる値段だけでは、信用性が今一つ。なっとくできる仕切りを得るためには、問屋も仲買行為をやるのが確実な手段だった。

さて、専業と兼業を合わせて七〇〇軒近くの問屋である。二〇一五年一月現在の築地市場の水産仲卸の数六五〇。これよりも多い。

昔からこんなに多くはなかった。江戸時代は封建制度のもと、問屋の数をきびしく制限しており、幕末期で二〇〇軒ほど。それが維新後の自由営業時代に入つて爆発的に増えたのだつた。漁業の発達や人口の増加で取引量も増えてはいたが、それを越える勢いで増していた。その結果、調査摘録は、大部分の業者が「資本薄弱」と記している。爆発的に増えた業者、し烈な競争があつたことは容易に想像できよう。

古来、問屋は浜方（荷主または漁業者）へ仕込金を前渡しし、浜方はそのカネで道具の用意ほかもろを準備して魚を入手。問屋にその魚を委託販売してもらい、代



「日本橋魚市場ニ關スル調査摘録」表紙。閉鎖的な魚河岸の調査には、相当な苦勞と時間を要したらしい。

緒言

日本橋魚市場ハ明治二十二年以來改造移轉ニ付盛ニ論究セラレ今日ニ至レリ而モ今尙之レカ解決ノ緒ヲ得ルニ至ラス
同市場ノ現狀ハ同業者ノ雜然タル集團ト云フモ不可ナク其ノ規約ハ有名無實ノ如キ狀態ニアリテ市場組織ノ缺陷設備ノ不足及運輸ノ不便等ハ相俟テ取引上多クノ損失ヲ市民竝ニ當業者ニ蒙ラシメツ、アリ單ニ同市場ニ及ホス損害ノミニ就テ考フルモ之ヲ取扱高ノ一割ト看做セバ年額約六百萬圓ニ達ス惟フニ現代ニ於ケル日本橋魚市場ハ單ニ當業者ノ魚市場ニアラスシテ其ノ取引區域ハ益々擴大セラレ從ツテ利害得失ノ及ホス影響亦愈々多大ナラサルヲ得ス之レ市民力其ノ解決ヲ熱望スル所以ナリ殊ニ本問題ハ近代喧シクナレル食糧問題解決上重要ナル地位ヲ占ムルモノニシテ獸肉野菜雜穀等ノ重要食料品市場建設ノ中核ヲ爲

調査摘録は、前書（緒言）からして手きびしい文言が連なる。

償としていた。いわば仕込金というカネで、確かな契約関係が結べていた。しかし、「資本薄弱」な問屋に、その余裕はない。力を失った問屋に対して、荷主は古くからの関係に縛られることなく、複数の問屋と付き合い始める。零細な業者による戦国の時代となり、不正が横行。しかし取り締まるすべもなく、弊害は増すいつぼうだった。

●板船権という既得権

調査摘録では、組織の補助機関として板船や茶屋、冷蔵庫、荷さばき所ほかの施設、および小揚げや軽子、付属の運送業者等について記している。

このなかで注目すべきは板船権だろう。

板船とは、旧幕時代からの慣習で、魚を陳列するための平板のことだが、実際は売場所を意味していた。なにしろ日本橋魚河岸には、市場のための店舗などなく、日本橋三越と道をはさんだ一万坪ほどのエリアでの路上商売、道に置いた板船が、即売り場所である。

具体的にどんな風だったのか、築地市場のマグロ仲卸「尾寅」の先々代、尾村幸三郎著「日本橋魚河岸物語」を引用させてもらおう。

△私の店「尾久」は本小田原町二十四番地にあったが、そこは住宅であつて、魚を売るのには、本船町の俗称「二十軒」と呼ばれるメインストリートの角にあった「尾寅」の前の一部を借りていた。本小田原町の私の住宅の前は「海亀」と云う、尾久の番頭から独立した人の店と「薪伊三」と云う「エビ業者」が商売をしていた。▽

尾村家の前の道路では他人が店を開き、尾村家は別の通りで商売している。「尾寅の前を借りていた」とあるように、月々の使用料を払っていたようだ。尾村家の前で商売していた人も同様だが、尾村家へ払うのではない。この売り場所の権利、すなわち板船権を持っている人に払う。著書によれば、自宅の前で商売できる人は少なかったという。

さて使用料を受け取る先、すなわち板船権は、だれが所有していたのだろうか。組合とするのが順当だが、組合は賃料の設定ともろもろの管理者に過ぎなく、所有していたのは組合員個人であった。この板船権の所有者、すなわち板船権者の数は、当時で一八〇名。組合員の約二割にあたる。賃料は、組合の規定では板船一枚につき二円五〇銭としていたが、三四五〇銭から場所によつては五円以上。さらに新たに借りるとなると、敷金が安くて二〇円、高いものでは五〇円を必要とした。

板船の寸法は、幅一尺、長さ五〜六尺とあるから、約三〇センチ×一五〇〜一八〇センチの大きさだ。板船一枚では、たいした商売はできないだろうから三枚、九〇センチ幅の板船を借りるとすると、標準値段で一〇円五〇銭。昔の借家は安かったというが、ほどほどの一戸建てが借りられる値段だ。

これほどの収入があるのだから、板船権は相続できる財産であり、なんらかの理由で手放すときは、組合員に譲渡した。調査摘録に譲渡価格は記されていないが、一八八九（明治二十二年）、日本橋魚市場組合が記した「日本橋魚市場沿革紀要」に

板船権は組合員個人が所有しており、大きな財産でもあった

よれば、平均一枚六〇円。高いものは「府下第一等ノ地所売買ノ価格ヨリ今一層実ニ驚クヘキノ高値」と、かなり自慢げである。沿革紀要が出版されたのと同じころの銀座一坪の値段が五〇円。〔値段史年表〕・週刊朝日・一九八九年刊。板船料、まこと驚くべき高値である。

しかし、ある意味、板船権とは路上を占拠してショバ代をとるテキヤさながらの既得権。さらに恩恵に預かっているのは一部の組合員だけ。理解しがたい不可思議なシステムである。築地へ移転後、板船権の補償をめぐる疑獄事件まで引き起こす大きな問題となるが、容易に補償金はおりず、戦時調停でお涙金の結果に終わったのは、市場関係者以外は理解しにくかったことが最大の理由だった。

●運輸について

運輸面についていえば、貨車便が船便を圧倒していた時代だった。船便を使っていたのは、三崎、伊豆、房州といった近海からで、それも輸送力のある大型船は、いったん霊岩島の汽船発着所で小型船に積み替えて魚河岸に運んでいた。隅田川から日本橋川に入ると、鰐橋や江戸橋などの橋があるが、大型船では橋げたがつかえてしまうのだった。そういえば明治期以降の魚河岸風景に大きな船の姿は見当たらない。

いっぽう、明治以来の鉄道の発達はめざましく、東北、常磐、北陸、関西と遠方の産地は貨車便を使い、全入荷量の七割弱を占めるまでになっていた。ところが日本橋の近くに最寄り駅はなく、隅田川駅、両国橋駅、汐留駅、品川駅を着駅として、そこ

から荷馬車やトラックで運んでいた。中継地点では天秤棒で担ぐなどの人海戦術であり、末端消費者に渡るまで、多くの人の手を経ていた。

- ①漁業者 ②荷主 ③發送運送店 ④鉄道省 ⑤着運送店 ⑥魚河岸附属運送店
⑦小揚げ業者 ⑧問屋 ⑨仲買 ⑩軽子 ⑪茶屋 ⑫小売商ならびにそのほかの購入者 ⑬消費者

日本橋の近くに最寄り駅はなく、十二もの中継地を経て消費者の手に渡っており、その都度、運賃や手数料がかかっていた

十二もの中継地を経て消費者の手に渡っており、その都度、運賃や手数料がかかってくる。ことに東京についてからがかさんだ。その一例として、農商務省が行った当時の調査によると、宮城県塩釜駅―東京市隅田川駅間の鮮魚一トンに対する運賃は七円五〇銭。ところが隅田川駅―魚河岸の荷さばき所までの運賃一〇円五〇銭。さらに問屋までの小揚げ料が五円。なんと、塩釜―東京間の二倍以上の運賃がかかっている。

●衛生面

調査摘録の最後の章は衛生について。衛生面に関しては、江戸時代からとかく問題になっていた。明治の初め、魚河岸が店開きするエリアを決め、その入り口に当たる道路に木戸を立てたのも、「不潔候ナル」様子を一般通行人に見せないためだった。あれから五十年もたつのに、なんらの改良もなく、「不潔言外ニ絶スルモノアリ」と、強い調子でその欠陥をあげている。抜粋してみよう。

ハ未ダ雨露風塵ヲ防グベキ一基ノ建物ナク一坪ノ不浸透性地盤ヲ有セズ泥濘踵ヲ没スル路上、汚泥ノ埋積スル溝板ノ上ニ空箱ヲ構エ横へ板ヲ載セ之レニ魚介ヲ陳列シ其

雨露をしのぐ建物はなく、地盤は踵が埋まるほどぬかるみ、ヘドロで埋まった溝の上に板船を用意して魚を陳列

ノ周囲及路上ハ古筵、古俵、古縄等ノ塵埃堆ク群衆ハ其ノ上ニ右往左往シヽ雨露をしのぐ建物はなく、地盤は踵が埋まるほどぬかるみ、ヘドロで埋まった溝の上に板船を用意して魚を陳列。買い出し人は、古縄や古むしろなどで散らかり放題の通路を右往左往している、と板船が並ぶ通りを描写している。

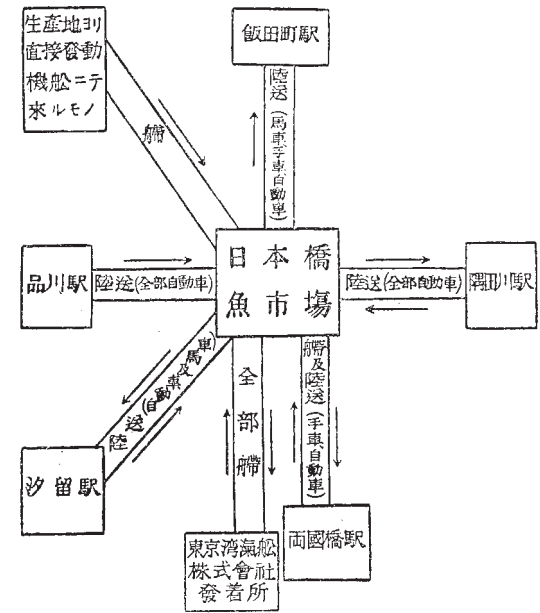
目を覆う惨状はさらに続く。

△下水ハ直チニ河岸ニ流注スルヲ以テ魚揚場付近一帯汚泥、塵埃堆積シ尚ホ又市場ニ群ル者頻リニ放尿スルヲ以テ干潮時ノ如キ臭気鼻ヲ突キ汚穢見ルニ堪ヘズ、其ノ間ヲ流ルル暗灰色ノ濁水ハ生棲ヲ運び生魚ヲ活シ鮮魚ノ洗浄ニ使用セラルヽ

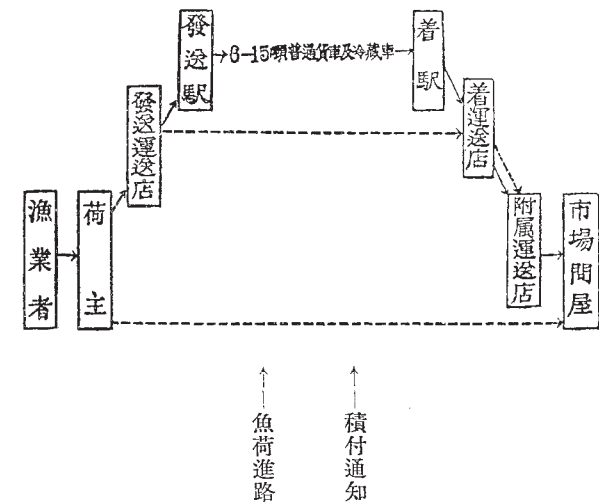
ハンカチで鼻を押さえながら魚の荷



東京でもっとも繁華な通りの路上を封鎖して、こうした光景が展開した。



東京の各物流拠点から日本橋魚市場への物流。



産地から魚市場への流通経路。

(出典：『日本橋魚市場ニ關スル調査摘録』)

揚げ場や日本橋川を眺めるお役人の姿が目につく。彼いわく、日本橋川はドブの延長、いや人々が便所代わりに使うので、臭気もひどく穢さはそれ以上、となげく。そして、「何等ノ設備ナク寧口魚類ヲ汚染スル處アリト言フナリ」と、とどめの一言で結んでいる。

■調査摘録の向こうに

築地市場の姿が見えた

弊害としてあげられたマイナス要素をプラスへ

まあ、書きたい放題、罵詈雑言とはこのことだ。ため息まじりに読んだものだが、いっぽうで頭に描かれてくるのは、築地市場の姿である。弊害としてあげられたマイナス要素をプラスへ。それが築地中央卸売市場であったのだと。

- 零細な問屋集団を一つにまとめ、強い問屋（卸売人）を作ること。
- それにより、問屋と仲買の仕事に分けること。
- 物流コストを下げるために鉄道を市場内に引き込むこと。
- 安心安全な施設を造ること。

しかしこうしたコンセプトは、今現在、築地市場にいて、昭和の終わりまで鉄道が敷地内にあったなどの情報を持っているからこそ描けるアウトライン。当時、欧米先端市場を見たことのあるお偉方はさておき、どれだけの人が想像し得たであろう。

民営から公営へ。物流効率のいい施設作り。市場機能と設備構造の抜本的改革。山のような課題をクリアして築地中央卸売市場に着地するには、長い時間とエネルギーを要した。まるで波打ちぎわで砂山を作るように、試行錯誤、波乱万丈の道のりだった。

その一步は、明治の移転問題から始まる。

築地市場の一步は、明治の移転問題から始まる

■夢追い人、明治官僚の失敗。

「魚河岸を移転させよ」

明治の人は壮大な夢を描き、実現させてしまうおそれるべき実行力の持ち主だった。鉄道、電灯、赤レンガの建物、洋装、洋食……、またたくまに日本を欧米風に変えてしまった。しかし、時には失敗もあった。その一つが、日本橋魚河岸の移転プランではないだろうか。

一八八四（明治十七）年、時の政府は東京市の大々的な都市改造計画「市区改正」の審議に入った。お手本は、ナポレオン三世下、花の都パリに実現した街並みである。夢のようなプランが出された。以下、藤森照信の名著「明治の都市計画」からを要約して紹介しよう。

- 旧幕時代の通りを、シャンゼリゼ通りのようなブルバール（並木路）に。

時の政府は夢のようなプランを考えた

- 上野公園は紳士淑女が集うブローニュの森のごとくに。
- 官庁街は、ルーブル宮の例にならって皇居前に集め、様式を統一して美観地区に。
- 歌舞伎小屋は、オペラ座のような華麗な劇場に。
- 本格的なグランドホテルも。
- そして、市民のための市場だ。これは一か所に集中させ、かのハール・サントラルのごとくに……。

「ハール・サントラル」とは、ランジス市場ができる前のパリの中央市場「レ・アール (LesHalles)」のこと。パリ一区にあり、鉄とガラスをふんだんに使った一〇棟の建物が並び、ガラスの屋根を持つアーケードでつながっていた。パリ視察に出向いた明治官僚たちは、一八六六年にできたこの建物を別世界のもののように眺めたことであらう。イヤ、明治の人々である。一等国になるには、我が国もこのような市場を、と燃えたであらう。

しかしいきなりブルバールにブローニュの森では、飛躍しすぎ。審議は回を重ねるごとに、現実的になってくる。

市場については、市中に点在している市場を集中させ、総合的なものとする。ことに町の中核に「不潔候ナル」醜態をさらす日本橋魚河岸の存在は、一等国をめざすお偉方には、なんとしてもめざわりであった。まずは新市場の位置を決めよう、それは町の外周がいい、などと決まっていく。

一八八九（明治二十二）年、東京府は「東京市区改正設計」を
発表。市場の場所を指定する

そして、一八八九（明治二十二）年、東京府は「東京市区改正設計」を発表。市場を設けてよい場所として、次の三か所を指定した。

第一・箱崎魚鳥市場附獣肉市場（日本橋区）およそ四万一五〇〇坪

第二・芝魚鳥市場附獣肉市場（芝区）およそ二〇〇〇坪

第三・深川魚鳥市場附獣肉市場（深川区）およそ三九〇〇坪

以上の地へ、向こう一〇カ年の内に移転させる方針を示した。

しかし、明治政府はカネがなかった。そこで、用地買収から施設の建設にいたるまですべて業者側の負担としたのである。

自前でやれるはずがない。そもそも市場の人間は、豪勢に飲み食いたりで派手にみえるけど、内実はカラッケツ。それをご存じなかったか。これが失敗、といわずしてなんといおう。

案の定、移転延期願を出しては受理のくりかえしで、たちまち明治も終わりに近づいてしまう。

さらに、ここここへ至って移転話がぶれるようなプランが浮上してくる。魚河岸の移転による日本橋の衰退を危惧した東京市の市会が内務省にあて、現在地再整備案を提出したのだ。

さあ、力を得たのは魚河岸の組合で、具体的な再整備プランに乗りだす。「棧橋案」と呼ばれたもので、日本橋川に棧橋を張りだし、二〇〇〇坪の用地を確保、ここに施

魚河岸の組合は、「棧橋案」を
だすが、新興の間屋たちは真つ
向から反対。再整備か移転かで
組合は揺れた

設を設けるというアイディアだ。すでに明治も後半、銀座を見たらハイカラなレンガ建ての商店街、丸の内の一丁倫敦と呼ばれるあたりは、ブロックコートのイギリス紳士を歩かせても恥ずかしくないビジネス街ができていた。川の上に市場を作るなんて造作もないこと、と組合の重役連は張り切った。組合内で役員は重役と呼ばれ、板船権などの既得権を持つ大間屋たちで、おいに再整備案を宣伝した。なにしろ、彼らは移転すると、かなりの収入源である板船権が通用しなくなるというおそれがあり、力がこもった。

しかし、市場というのは個々の商売上の利益がからんで公的なことがなかなか決まらない場。再整備案に真つ向から反対する層があった。板船権など既得権を持たない新興の間屋たちだ。彼らは移転候補地に指定されている箱崎町の一区画、中洲への移転をぶちあげる。

再整備か移転か。築地暮らしの人間が、ついこの間まで耳にしていた論争が、明治の日本橋でも熱く展開されていたのだった。

■田口達三と安倍小治郎、 小僧上がりの二人のカリスマ

このように移転か再整備かで揺れていた魚河岸で頭角を現してきた二人の男がい

田口達三と安倍小治郎――、移
転から築地開場への道をカリスマ
的に切り開いた人物

た。田口達三と安倍小治郎――、移転から築地開場への道をカリスマ的に切り開いた人物である。安倍は「私は小僧上がりという言葉を、むしろ誇りに思っている」と、自伝「さかな一代」で述べているが、田口は「堺大」、安倍は「須賀甚」の小僧として魚河岸の一步目を踏み出した。

二人はなかなかの商売上手だった。小僧上がりの誇りとは、魚河岸の古くからの因習慣習にとらわれず、商売を切り開いた、切り開けた、ということではないだろうか。そのいい例が、安倍小治郎が独立して持った店「共同水産」で、魚河岸初の株式会社として発足。周囲の反発はかなりのものだったが、「今に世の中、そうなる」と押し切り、魚河岸一の稼ぎ頭になってしまった。

田口はもう少し地道に動いた。田間屋の縁故に頼る封建的なやり方を避けて、せつせと新しい産地を開拓した。当時、魚河岸の取引産地は、北はせいぜい常磐止まりだったが、東北、北海道まで足をのばす。その結果、気仙沼の竹輪を知り、東京の竹輪販売のパイオニアとなる。鯨を東京で広く食べるようになったのも彼の手腕だ。東京にも鯨は入荷していたものの、肉が黒くなってしまう、なかなか売れない。田口が八戸の解体場を訪ねると、解体したばかりで生温かい肉を樽詰めしている。これでは黒くなるのも道理。そこで、氷入りのタンクで肉を完全に冷やしこんでから送ることを思いつく。大々的な宣伝のいかもあって売れるようになったと、自伝「魚河岸盛衰記」で述懐している。独立した田口の店「堺辰商店」の周囲は、料理屋向けの魚を扱う特

種物専門が多かったが、競合をさせた堺辰はイワシから鯨まで売る大衆魚専門、ついには魚河岸でも五本の指に入る店になっている。

安倍が剛なら田口は柔。異質な組み合わせだから、より大きな力が生まれた

商売の中身も異なったが、人となりも好対照であった。若き日の安倍のあだ名は「書生っぽ小僧」。通信教育で早稲田大学を卒業した学究肌である。いっぽう田口は、独立したのに元奉公先が存続の危機となれば番頭として戻る人情家だ。会議の席、安倍は整然とその理論を展開する。田口はあまり発言しない。しかし最終的な結論を引き出していくのがうまい。安倍が剛なら田口は柔。異質な組み合わせだから、より大きな力が生まれたのだろう。

二人が初めてチームを組んだ大仕事に休市制定がある。昔の魚河岸といえば、休みは元旦のみ。そこで二人は若い世代に「市場にも定休日を」と働きかけた。荷主は「胃袋に休みがあつてたまるか」と怒ったし、問屋の主人たちも「若い者が遊びほうけて仕事にさわる」と反対した。しかし熱心に説いて回り、一九一八（大正七）年、月のうち二二日が定休日となった。

この時、田口、安倍ともに三三歳。板船一枚借りるにもへいこらしていた小僧上がりが力をつけ、モノ言える立場となり、動き出したのである。

■日本橋魚河岸のターニングポイント、

一九二三年

一九二三（大正十二）年というのは、関東大震災が起きた年だ。日本橋魚河岸も大きな被害を受けた。魚市場組合にとつても、まさに激動の一年。春に「中央卸売市場法」という微震に揺れ、秋には本物の大地震のために組合員は散りじりに。そして、気がつけば凍てつく冬空、海軍の要衝である築地に流れ着いていたのだった。

一九二三年という年を改めてふりかえってみよう。

三月、「中央卸売市場法」公布

三月、「中央卸売市場法」が公布された。

この法律は、生鮮食料品の物価調整をはかるために生まれた。

第一次大戦前後の食料品の値上がりはすさまじく、一九一八年にはついに全国的な米騒動にまで発展。深刻な事態を受けて、国は公設の小売市場を各所に設けた。しかし、すぐに行き詰ってしまう。やはり、おおもとの卸売市場を公設にすることこそ根本的な対策であるという結論にたどりつく。そして、取扱いや機構ほか法の下で定め、運営する中央卸売市場を作るため、その根幹を記した「中央卸売市場法」ができた。

日本橋魚河岸の人々が、この法律をどの程度理解したかはわからない。しかし再整備はムリかもしれない、移転やむなしという空気が色濃くなってきたのはたしかだったろう。

六月。移転反対派の大物、小網源太郎が欧米の市場視察へ

六月。移転反対派の大物、小網源太郎が欧米の市場視察に出たのもそんな空気に押されてのことだ。出発直前、小網はひそかに移転推進派の急先鋒、安倍を日本橋の待合に呼び出す。

「君を男と見込んで頼みがある。私は、三、四カ月で戻る。中央市場の建設は、数年後だろう。戻ったら、反対派の連中を説き伏せて全員一致で中央市場の建設に当たるつもりだ」と、心の内を告げる。

明治中盤以降、役人や知識人といわれる人たちはこぞつて欧米の市場へ視察に出ており、相次いでその報告書が出版されていた。市場問題を語るとき、「ロンドンのピリングスゲート魚市場では」などと欧米の市場が引き合いに出されるようになっていた。小網はそんな欧米崇拜の風潮を小バカにしていたが、実は心中穏やかではなかった。

小役人どもがお題目のように唱える欧米の市場とやらをじっくり見てやろうじゃないか。そして先進の市場情報を帰国後の武器にして移転問題に臨もう。そんな計画を胸に、一路、カナダへ向かった。

ところが、帰国してまもなく死去。夢は果たせずに終わる。しかし、残された著書「欧米魚市場視記」は、現場を知る人ならではの視点で記録されており、その功績は大きかったように思う。

■大震災勃発。日本橋には ついに戻れなかった

九月一日正午二分前、東京市をマグニチュード七・九の大地震が襲う。東京市の死者行方不明者九万人、全壊消失戸数四六万戸以上。魚河岸でも四〇〇人もの死者が出た。多くは河岸につながれた船で逃げようとした人たちだ。船は、高潮と重なり、江戸橋や日本橋の下を通ることができず、川面をなめるように走ってきた炎に包まれたのだった。魚河岸は一日にして焼け野原となった。

安倍や田口たち移転派は、震災三日目、市場再開の場提供を永田秀次郎市長に申し出た

安倍や田口たち移転派の行動は素早かった。震災三日目、市場再開の場提供を永田秀次郎市長に申し出る。

九月六日。東京市助役の名刺を手に、再開場所を探して回る。かねて候補にあがった築地の海軍省用地も訪ねたが、がれきの山で使えない。芝浦にさら地を見つける。

九月一三日。芝浦に仮設の市場を開くことが決まり、陸軍から借りたテント一〇張で体裁を整えた。一七日開場と決めたが、交通がマヒしているので、荷がこない。倒壊をまぬがれた葛原^{くさはら}商会の冷凍庫にあった冷凍の鮭を買って急場をしのぐことにする。日本初の冷凍食品は魚から始まり、葛原猪平ひきいる葛原商会の手で本格的な流通が始まっていた。不人気の冷凍魚だったが、震災ではどんなに助かったことか。これが後の普及につながるのである。



大震災直後、芝浦日の出町で仮営業開始。
写真は、築地へ移る直前の芝浦の様子（写真。個人像）。



1923 年、関東大震災直後の日本橋。左手に三越、右手に魚河岸が広がっていた。



1918 年頃の築地海軍省風景。臨時市場は、写真右端の川沿いにそってできた。



震災のすさまじさを物語る日本橋小田原町付近。魚河岸は、一夜にして壊滅した。

九月一七日芝浦に仮設の市場を開場

九月一七日。鮭を売りきった広場にテーブルを運び、安倍は飛び乗って声を張りあげた。

「ともかく市場は再開した。不便な土地だが、いましばらく辛抱してください。東京市が臨時の市場を準備しています」

だれかが「安倍さん、ありがとう」と叫んだが、その声も拍手にかき消された。安倍は、生涯でもっとも感動した日だったと自伝に記している。

芝浦に集まったのは、移転賛成派とノンポリ組であり、反対派は日本橋魚河岸で再開を試みた。しかし戒厳令がしかれており、再開のための集会でも開こうものならたちまち警官が飛んでくる。魚河岸内の住まいを補修して、商売を始めるとだちに営業停止命令が下る。日本橋再開を願う人たちは、重役派ともいわれた組合幹部で資産家が多い。彼らにここで再開の狼煙（ろうし）を上げられでもしたら……。東京市は徹頭徹尾、再開を阻止したのだった。

■震災直後の慌しさのなか、築地が新市場の地に

こうした復旧の動きとともに築地中央市場への道も慌しく切り開かれていった。

九月八日、永田東京市長は田健治郎農商務大臣へ書状を送る。

「前略……………応急的二築地海軍造兵廠焼跡及其ノ附近ノ地ヲ海軍省ヨリ借用シ臨時魚市場ヲ至急開始致度候……………」

九月一二日。「一刻も早くに築地へ」と湯浅警視總監も農商務大臣へダメ押しの一通を送る。

「……………日本橋魚市場移転問題多年ノ懸案ニ属スルヲ以テ仮市場ノ位置ノ如何ハ本問題ノ解決ニ重大ナル関係アルト認メラルルヲ以テ此ノ機会ニ於テ速ニ魚市場予定地ヲ決定セラルルハ最モ肝要ナルモノト思科候」

移転問題の解決には、築地しかない

移転問題の解決には、築地しかない。官僚トップの慌ただしいやりとりが続く。

一〇月八日。早くも農商務大臣は、永田市長に築地の臨時市場での心得を文書で送る。

「……………築地臨時市場ハ将来開設セラルルベキ中央卸売市場ノ前身トモ相成ベキモノト認メラレ候ニ就テハ出来得ル限り中央卸売市場法ノ精神ニ準ジテ経営ヲ為ス様……………」

中央卸売市場の前身として中央卸売市場法の精神で経営を望むとして、開設前に改善すべきことを記した。

- ① 問屋と仲買の仕事を分けること。
- ② 名義だけの者は、新規業者として認めない方針で臨むこと。
- ③ 問屋については荷主からの荷受け状態を調査し、その実績が認められる者のみ

一〇月一九日。後藤新平内務大臣を総裁とする帝都復興院が、「帝都復興計画」の骨子を作成。帝都復興計画の一つとなった。

とすること。

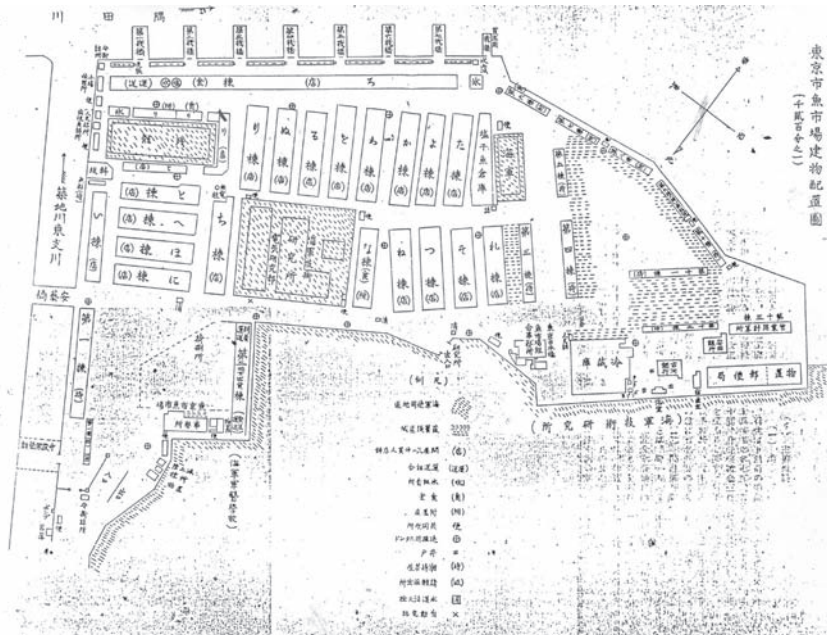
- ④ 取引はセリ売りに移行すること。
- ⑤ 問屋が仲買に荷物を引き渡すとき、値段を決定すること。

つまりは、すみやかな員数の削減と取引方法の改善を迫るものだった。しかし、いささか性急にことを運び過ぎた。勇み足というべきこの理想論は、いざ築地移転となり、大混乱の元凶となる。

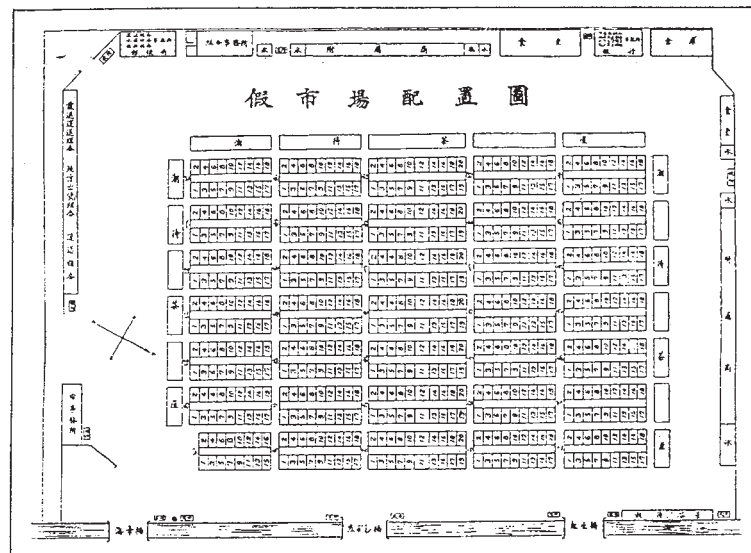
一〇月一九日。後藤新平内務大臣を総裁とする帝都復興院が、「帝都復興計画」の骨子を作成。大震災前、東京市市長であったころ、東京市の壮大な都市改造計画、通称「八億円計画」をもくろんだ後藤にとって、運命的ともいえる天災だ。「震災は理想的帝都建設のための絶好の機会」と燃える。事業費を試算。ざっと四〇億。当時の国家予算ですら一五億という時代だ。とてもムリ。四億ほどに決定。さまざまなプランが削りに削られた。

しかし当初からプランに入っていた中央卸売市場の建設は残った。これで予算がつく。カネは出さぬが引越せ一点張りの明治の都市計画（市区改正令）とはなんたる違い。

一月六日。東京市は、海軍省より海軍技術研究所の一部を借り、警視庁の食品市場開設の許可も得て、施設の建設に着手した。海軍技術研究所というのは、弾薬など武器を製造する「造兵廠」や「海軍艦型試験所」「航空機試験所」が統合したもので、



築地での営業は1923年12月スタート。大震災直後のこと、施設はバラック建てで、隅田川に面した海軍省の敷地約1万坪に図のように配された。



暫定市場の配置図。築地市場の敷地内で本工事が始まり、隅田川河畔の施設は、1930年、海幸橋口寄りに移転。築地市場入場までは、ここで営業。

一二月一日、築地仮設市場の開
場式。一一時開会

この四月に誕生したばかりだったが、震災で焼けてしまった。かなり物騒な場所だが、ここしかなかった。現市場の勝鬃橋寄りの隅田川に添ったあたりで、市場用に借りた敷地は一万坪。中央にバラック建ての建物を配置して冷蔵庫や棧橋を設置、焼け残った建物に手を入れて、組合事務所とした。店舗は一二〇〇ほどの業者に平等に間口三尺奥行一間半の広さで割り当てることとした。突貫工事は一月末日に終了する。

■一九二三年二月一日、 築地での新たな日が始まる

翌二月一日、早くも築地仮設市場の開場式がおこなわれた。日本橋魚市場組合の日誌には、この式典のことが記されている。

天気晴朗とある。市場施設に紅白の幕を張りめぐらした会場が設営された。一一時開会。永田市長や田農商務大臣らお歴々の祝辞が続く。最後に組合頭取の池田三治郎が謝辞をのべた。

「今時の大震災は、その災害、実に名状すべからざるものありといえども、このために帝都の事物流人心を革新せしむる一大動機となり、なかなしく帝都四〇年来東京市の懸案たる魚市場の問題を推進……我々当業者は東京市の意思の存するところを尊重すると同時に市当局においても当業者をよろしく指導願いた

い」と移転賛成派の池田は、腰の低いところをみせた。

アトラクションとして、安倍が「目出度き競売の型を披露」した。中央卸売市場法では、売買はセリ売りとなされており、やがて開設される中央卸売市場への業者側の心意気をみせたのだらう。

この日、安倍はほとんど寝ていなかった。組合役員席に座る田口の重たげなまつ毛の下の目もいかにも眠そうだ……。

実は、芝浦から築地への移転が組合の総会で決まったのは、開場式があったほんの数時間前だった。

総会会場となったのは、芝公園にある貸席三縁亭。二〇畳ほどの部屋は組合役員のほか、移転反対派一〇〇名ほ

芝浦から築地への移転が組合の
総会で決まったのは、開場式が
あったほんの数時間前



1923年12月1日、築地初日から始まる日本橋魚市場組合の日誌。

天災により、当面の最大課題、移転問題にけりがつく

どが押しかけ大騒動になった。反対派にはいくつも言い分があった。まずは日本橋で再開すべきという意見。芝浦に残りたいという意見。芝浦は不便な地だったが、復興景気もあつて儲かり始めていた。さらに、農商務省からの通達を知っている人もいた。噂では、人員整理があるという。築地に行ったらなにが待っているかわかりはしない。芝浦がいい、いや日本橋だ。騒ぎは収拾がつかなくなり、警官隊が飛んできて、会議を取り巻く。議長役の田口、執行部説明役の安倍、両人は暴力沙汰になつてもおかしくない殺気だつた空気のなか、移転への採決を断行したのだった。

ともあれ開場式は三〇〇人もが出席し、大盛会のうちに終わった。

なによりほつとしたのは、東京市だつたらう。移転という頭の痛い問題が、天災の力を借りて一挙に解決したのだから。かりに魚河岸がテコでも動かぬ、現状のまま続けるとなつたら、強制的にでも閉鎖せざるを得ないだらう。そうなる多くの失業者が出る。その対策はどうするか。万を超える人の莫大な補償金など払えるはずがない。当面の最大課題にあつという間にけりがついた。

やれやれ、これで魚河岸も東京市の統括下に置かれ、市設臨時東京市場として明日から営業が始まる。

■早くも波乱含み。

松本楼襲撃事件、そして板船疑獄

しかし、警官が見守るなかでの強行採決にしこりが残らぬはずがない。

築地初日から始まる魚市場組合の日誌を讀んでいこう。

一九二四年三月二五日。築地で四カ月ほどが過ぎたころだ。魚河岸選出の市會議員壺野房治からの「来年度の予算案に魚市場の使用料と売り上げ手数料が計上されるようだ」という報告が記してある。組合にとつては、寝耳に水の話だった。そもそも今使っているバラックの施設は、市のボランティア施設ぐらいに思っていた。板船持ちにいたつては、使用料を取る側できたのに取られる側に回るとはまったく心外であつた。しかし東京市の管理下に置かれたのだから、当然のことではあつたが……。

以後の組合の動きは慌しい。

翌二六日には数百名が結集しての臨時大会が開かれ、抗議文を市長に提出。二十九日、予算編成会議当日は、車五〇台に分乗して予算編成会議に押し寄せた。傍聴席に陣取るほか血の多い若い衆は市役所の玄関前でむしろ旗を振つて氣勢を上げる。組合の日誌には「殺気横溢騒然」と記してある。

しかし、予算案は可決。

そして事件が起こつた。

強行移転のしこりは、施設使用料や手数料問題を機に、思わぬ方向に展開

使用料問題をきつかけに、組合は板船権などの補償について改めて考えるようになった

玄関前にたむろしていた若い衆の誰かが叫んだ。「こうなったのも、小坂梅吉のせいだ」。小坂梅吉は、京橋区選出の市会議員。「地元出身なのに、最善を尽くさなかったからだ」。短絡的な考えに扇動され、小坂市議の自宅や経営する松本楼を襲撃。投石、丸太での打ちこわしと乱暴の限りをつくし、五〇名近くが築地警察に検挙された。まったく愚かな事件だった。しかし、それに輪をかけたような大騒動が続いて起きた。

実はこの使用料問題をきつかけに、組合は板船権などの補償について改めて考えるようになった。移転後の組合は、日本橋に既得権を持っていた大物問屋が牛耳るようになっていたこともあり、積極的に補償問題に奔走した。しかし前にも触れたように、そうした権利は理解を得がたく、市議会に議案として出されてもお涙金しか示されない。そのうちに組合費の使途不明金が議員への運動費だったことが発覚。芋づる式に組合幹部や市会議員が逮捕され、「板船疑獄」として世間の非難を浴びることになる。当時は疑獄事件が相次いで起こり、あからさまにカネで政治が動く時代でもあった。そんな風潮に魚河岸の人たちは余りにも素朴であった、ともいえるようか。築地へ移って早々に起きた二つの事件。しかしまだまだコップのなかの嵐に過ぎなかった。開場へ向けては、もっと困難な日々が待ち受けていた。

第二章・築地中央卸売市場開場

■人影まばらな午後、

市場の鼓動にふれる

午後三時、人影まばらな場内を歩く。仲卸棟のピンコロ石と呼んでいる花崗石を敷き詰めた石畳は、頻繁に行き交う人や小車のためにすり減り、魚の脂でいつもヌメヌメとしている。鮮魚のセリ場は、昭和の終わりまで東京市場駅のプラットフォームだった。鉄路がコンクリートで塗り固められた今は、妙な段差が残り、不便このうえない。しかし、二〇年近く、ここに暮らしているのだから、古い、汚いといわれても、愛着が悪口のすべてを否定してしまう。いや愛着を通り越して、この建造物を惚れ惚れと眺めることすらある。いろんな人に自慢もしてきた。

市場施設鑑賞三大ポイント。秋の西日が大きく傾いた午後のセリ場、夏の太陽が真上にある時刻の水産仲卸棟、春の朝の事務所棟二階の廊下

秋の西日が大きく傾いた午後のセリ場、夏の太陽が真上にある時刻の水産仲卸棟、春の朝の事務所棟二階の廊下。この三つが私の市場施設鑑賞三大ポイントである。ゆるいカーブがいい。さらに錯ついた鉄骨やコンクリートの壮大な骨組みに光と影がダイナミックな陰影をつくり、見入ってしまうこともしばしばだ。

たまに友人から「東日本大震災のときはどうだったの」と聞かれる。この質問は、



大きくカーブを描く事務所棟の廊下。柱も天井に向けてゆるいカーブを描いており、デザイン的なことまでかなり意図してつくられたことがうかがえる。

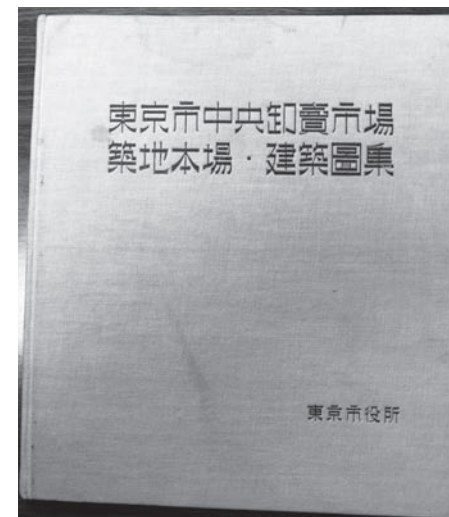


午後の仲卸棟通路。建設当初からの花崗石の石畳が濡れて光っている。長年の魚の脂がしみた通路は、時間のつくった味わいのある光景になっている。

完成の姿を伝える「東京市中央卸賣市場築地本場・建築圖集（東京市役所刊）」

実は愛するわが建造物に対して私の鼻がもつとも高くなる瞬間で、それを知られまいと、さりげなく答えてみせる。「関東大震災直後に考えられた建物だから、耐震構造とか考えたと思うの。大丈夫だったわよ」。そして「帝都復興計画の一つだったのよ」と、やんわり権威付けも忘れない。実はこの時代、大阪、京都、名古屋と大都市には次々と中央卸売市場がつくられたが、築地市場はある面、帝都復興院や復興局が主導した、という特異性がある。

完成時の姿を知るには、「東京市中央卸賣市場築地本場・建築圖集」というすばらしい一冊がある。一九三四（昭和九）年、東京市役所の刊行。お役所がつくったにしては、モダンな実にかっこいい写真集で、同じ敷地内の暫定市場で数千人の人が働いていたにもかかわらず、大八車や自動車はおろか人影すらほとんど見当たらない。市場の賑わいをゼロにして、ひたすら構図にこだわって対象物に迫った写真が続く。各施設はダイナミックな直線が強調されているが、基調の



1934 年刊、築地市場の建築写真集。

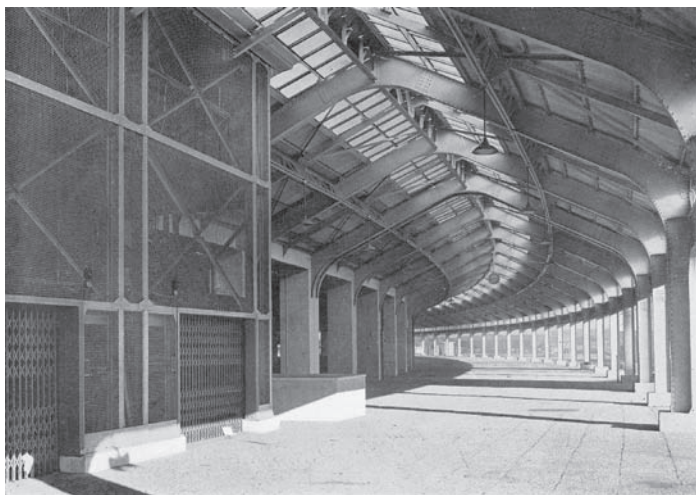


建築図集冒頭の全景図。

右手にある方形の施設が、新市場入場まで使われた水産物部の暫定市場。



正門前の広場から臨む仲買売場棟。基本の形は、現在もほぼ同じだ。



曲線は今と同じ。セリ場として使われた東京市場駅のプラットフォーム。



市場専用鉄道。汐留貨物駅から場内までの線路延長は約2.7km。



渡り廊下から、時計台を臨む。時計台は、新市場のシンボルであった。



魚類卸売場。右手が仲買売り場。現在、両棟は屋根におおわれている。

建物自体がゆるい曲線を描いているので、どこか温かみがある。

そもそも復興建造物は、機能美を追求しながらデザインにも気を抜いていないのが特徴だ。よい例が、隅田川にかかる清洲橋や永代橋などで、海外の事例を収集、画家にまでアイデアを求め、果ては「意匠審査会」にかけるなどして、美的な面にも力を注いだ。だから機能性一〇〇パーセントである市場施設だが、事務所棟のアールを描いた柱、セリ場にあるトイレの通風換気のための大きな丸窓など、少し離れた場所から見ると、なるほどと思えるデザインに気づかされる。

しかしこうした賞賛も、去るとわかつての感傷なのかもしれない。

■すぐれた頭脳を結集。

帝都復興事業が始まる

建設費の総予算は一五〇〇万円

帝都復興事業の一環となった築地市場。建設は東京市が受け持った。総予算は一五〇〇万円。うち三七五万円が復興国庫補助で、あとは帝都復興公債資金でまかなうことになった。

まずは用地の買収だ。大震災の翌年の五月、内務大臣は「京橋区築地四丁目及び南小田原町一丁目の内、九万八千坪」と発表。ところが大蔵省と東京市の地価感覚に大きなへだたりがあつて、予算内ではとても買えない。結局、今、朝日新聞本社や国立

がんセンターがある一帯を除いた六万坪弱で決着する。坪あたり単価は、陸地二二〇円、海軍が軍艦用の船着き場に使っていた入江などの水面部分が一三二円。それでも資金が足りず、川向うの埋め立て地、月島三号地（現在の中央区勝どき五〜六丁目）を大蔵省に譲るが、こちらは九五円。海軍用地の水面より安かつたわけだ。

設計プランも練られる。総大將は、東京市建築局長に招かれた東京帝国大学教授佐野利器^{としかた}。東京駅をつくった辰野金吾の愛弟子で、世界で初めて耐震構造理論を確立した建築界の大御所だ。当時の市長永田秀次郎は、「東京市の復興事業を指導してくれるのは、あなたしかない」と切々と説いて迎えたという。佐野は数年で建築局を去るが、在任中、市場の基本構造などにも関与している。

築地市場は、まず貨車便の線路ありきで全体の形が決まっていた

設計会議の机上には、あの調査摘録も参考資料として配られただろう。青写真が浮かんてくる。まずは物流コストを引き下げるために、市場に貨車を横付けすることだ。汐留駅からの引き込み線であれば可能だ。築地市場は、まず貨車便の線路ありきで全体の形が決まっていた。

欧米の市場の報告書も積み上げられたことだろう。まだ不足だ。佐野は松田清足との共著で「欧米中央市場集」を作成する。いや、具体的にはこの目で確かめる必要がある。建築課長の福田重義、設計監督技師小野二郎らが、慌ただしく欧米視察へ出かける。

設計の参考にしたのは、イタリアのミラン市場、ドイツのフランクフルト・アムマ

工事は、河川の埋め立てから始まった

イン市場やライプチヒ市場、ニューヨークのブロンクス市場など。ブロンクス市場は、前述の小網源太郎著「欧米魚市場視記」でも紹介されている。設計図を見ると、この市場は河畔にあつて大小の船のための棧橋が完備、また鉄道が市場内に敷かれており、築地市場の発想の原点を見る思いがする。

工事は、河川の埋め立てから始まったが、潮流が激しく、難航した。築地市場の海幸橋口にある波除稲荷には、江戸時代に築地を埋め立てるさい、荒波のために工事難航をきわめたというが、まさに伝説のとおりであった。

また用地には、松平定信の庭園「浴恩園」の広大な池も残っていたが、このとき埋め立てられた。

隅田川河川の浚渫土がサンドポンプで吸い上げられ、鉄管を通して池に運ばれる。不気味な地響きにもすでになれつこになっていた仮設市場の人々に、基本設計が示されたのは、このころ、一九二九（昭和四）年のことだった。

■業者側、猛反対。

鉄道ありきの扇形構造

基本設計を見て、組合側は愕然とする。東京市の設計会議には組合からも役員を送り込んでいたが、意向はほとんど反映されていなかった。ことに施設の核となる扇形

の売場には猛反発を示した。

扇形となった根拠は、一時に多数の貨車を引き込むためだ。一日平均の入荷量を、一〇トン貨車で魚類部、青果部合わせて八〇両と想定。一日二―三回の着車として、さらに到着、入れ替え、退避などを考えると、引き込み線の長さは二キロメートル以上。敷地内でこれだけの距離をとるにはカーブをつけるよりほかない。さらに迅速な荷さばきを行うためにプラットホームを卸売人売場とし、それに沿って仲買人売場を設けるとすると、効率のいいのは扇形であるとしたのだ。

しかし、扇形では、奥の売場は客が来にくい、店舗の広さも不均等、と組合は商売上の理由から反対した。東京市は、数度の設計変更を試みるが、扇形に変わりはない。対案として売場が方形の設計図を提出するが、すでに魚市場組合以外の青果や茶屋組合ほかすべてが承認済みということで、方形案は却下される。

組合側は「承認するも、扇面型のために営業不振となって廃業のおりは補償を求める」との陳情書を商工大臣に提出して一件落着となる。今なら一笑に付す内容だが電話注文など考えられない時代、扇形による場所のよしあしは死活問題。店の奥は客足が遠のき、いっぽう内側の場所となれば、それだけで繁盛は約束されたようなもの。そんな不平等をなくすために数年に一度の引越しをすれば、そのために倒産となる例も珍しくない。引越し場所は、商店街のくじ引きよろしくガラガラの抽選会で決まり、私も働いていた仲卸の社長にくっついて見学したが、たまたまい場所に当たっ

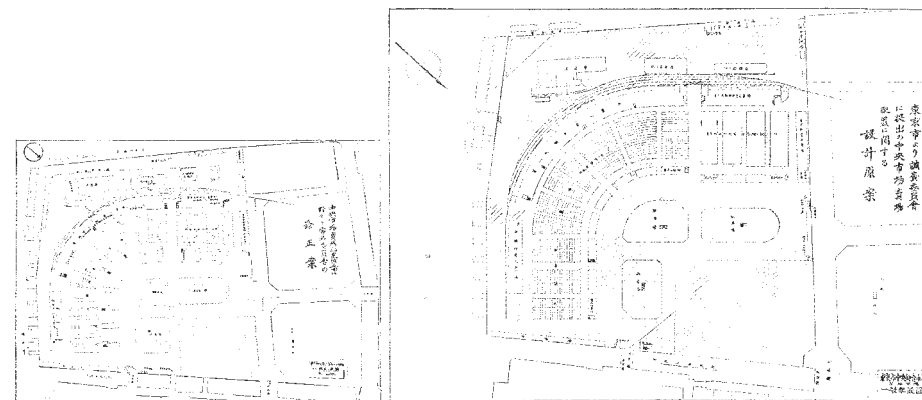
扇形では、奥の売場は客が来にくい、店舗の広さも不均等、と組合は商売上の理由から反対



雪の東京市場駅。

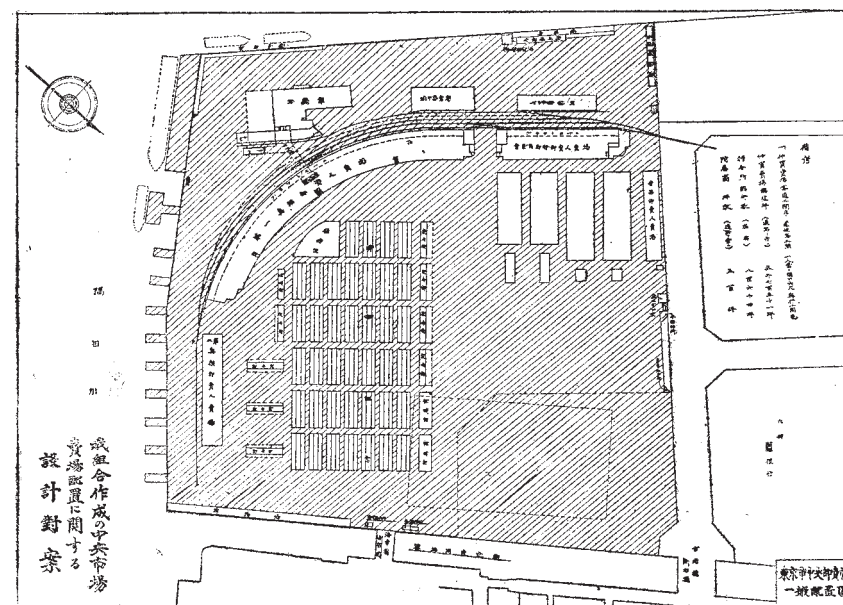


1988年1月31日、鮮魚列車レサの最終便を送る東京市場駅の光景。



東京市の設計原案

修正案。買荷保管所を施設に対して縦にすることで、荷物がより分散しやすいようにした。



組合が提出した方形プラン。店自体のおさまりはいいが、セリ場からの距離に不公平があり、使いにくそうだ。

築地市場、さまざまな設計プラン

た社長の興奮ぶりに驚いた。それほど場所が商売を支配していたのだ。

この扇面問題は二年間にわたり、組合議事録「東京魚市場組合彙報」ではそれを詳しく伝えているが、東京市の説明不足の感もあったし、組合の会議も常務委員会や本委員会でも可決するも最終決定の場で否決と二転三転、いたずらに時を費やしている場面が多すぎる。

印象に残ったのは、若い役員が「これからは自動車輸送が増えるだろうから、鉄道の引き込み線を短くして方形の売場に」と、発言していることだ。長老が優位を占める組合のこと、ほとんど相手にされない意見だった。しかし、同じ議事録のコラム、一九二七―三〇年の築地への輸送機関別取扱量を見ると、船便、鉄道便、自動車便のうち、自動車便のみ倍々ゲームのように伸びている。会議のあったころだ。方形プランを、自己の商売の損得だけではなく、こうした流通データで示していたらどうであつたらう。

しかし、復興予算の使用期限は迫っていたし、現人神あらひとがみとされた天皇の東京市復興巡幸で扇面型施設の模型もすでにご覧に入れている。そんな状況下、今さらデータを見せても相手にされなかっただろう。築地市場で鉄道便とトラック便が逆転するのは一九六四年。開場して三〇年ちよつとだ。戦争をはさまなければ、もつと前倒しになっていたかもしれない。人間の想像力より、文明とやらの進歩はずつと速い。高名な建築家をしても予測できないほどに。しかし、結局は、鉄道ありきの初期の理想に押し

切られたのだった。

■白亜の大旅館、東洋一の大市場、 かろうじて開場す

一九三一（昭和六）年五月九日。午前一〇時より、敷地中央に設けた祭壇の前に、地鎮祭が挙行された。あいにくの雨とはいえ、大臣や市長、そうそうたる来賓や関係者の見守るなか式典は滞りなく終了した。

魚市場が築地へ移転してすでに八年が経過していた。用地買収に三年以上、埋立てや護岸工事も難航した。さらに海軍諸施設の移転もあり、本来の工事のかたわらで建物の解体やら引越しが入り乱れて進んだ。ことに前年は海軍技術研究所、水路部、海軍軍医学校などの移転が相次いだし、本体工事の障害となるため隅田川河岸の仮設市場も海幸橋近くに引越した。これもまったく綱渡りのスケジュールで、軍医学校が引越すやすぐに建設にとりかかる。中央卸売市場開設直前の暫定市場とはいえ、一万三千坪ほどの敷地に三八棟の店舗、そして周囲には買荷保管所、付属店舗や食堂、運送業務所、郵便局、銀行、冷蔵庫などの建物を配置、現在の築地ミニ市場といった風に必要な要素はすべて整えた。これを五カ月で仕上げ、引越しはわずか二日で完了。このころはボックス型の帳場すら出現しておらず、身一つで動けばよかつ

用地買収に三年以上、埋立てや
護岸工事も難航した

た。

地鎮祭終了後、慌しく本体工事に入ってしまった。施工の中心となったのは大倉土木KK（現大成建設）、青果棟などは鴻池組が担当した。

一九三三年二月一三日。主要施設の工事を終えたので、竣工式を挙行。

「東京湾頭にき然として、長たのごとき白亜の大楼館を、扇型に建て連ねた東洋一の大市場（東京都中央卸売市場史（東京都発行）」、その概要を紹介しよう（カッコ内は二〇一四年四月現在のデータ）

市場敷地面積・・・約一九ヘクタール（約二三ヘクタール）

●建物

卸売人売場・・・水産、青果合計約二万二〇〇〇平方メートル（約三万七〇〇〇平方メートル）

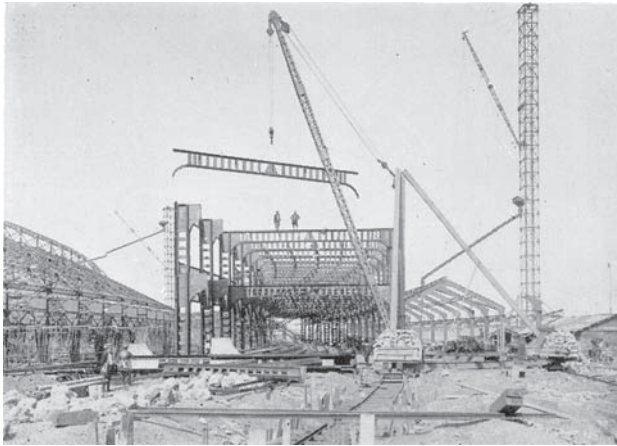
仲買人売場・・・水産、青果合計約二万九〇〇〇平方メートル（三万九〇〇〇平方メートル）

買荷保管所・・・約四〇〇〇平方メートル（約六三〇〇平方メートル）

冷蔵庫・・・約五五〇〇平方メートル（約二万二五〇〇平方メートル）

冷蔵収容能力・・・約二〇〇〇トン（約二万二〇〇〇トン）

このほか、時代を感じさせる建物として牛馬係留所、バナナ発酵室などがある。



建設途中の市場施設。圧倒的な鉄の量。この数年後、戦争のために金属品の強制的な回収があったことを思うと感慨深い。



鉄骨が縦横に走る建設中の市場施設

●設備

鉄道

鉄道引き込み線（汐留貨物駅―場内）全長二・七キロメートル。一〇トン貨車四〇両を引き込むことが可能。

水運施設

五〇〇トンクラスの船舶が係留できる岸壁。ほかに最大三〇〇〇トンクラスの船舶が係留できる鉄筋コンクリートの浮き桟橋など。

私設電話設備・七〇〇回線（一〇三九回線）

工事にかかわった延べ労力四二万人

カッコ内、現状の数字と比較すると「なあんだ」と思われそうだが、当時の東京市の人口六〇〇万人を思えば充分過ぎる規模といえよう。思い出してほしい、「日本橋魚市場ニ関スル調査摘録」を。「何等ノ設備ナク寧ロ魚類ヲ汚染スル處」と糾弾されたのは、わずか一〇数年前。あれが東京の市場だったのだ。明治官僚が憧れた花の都パリの中央市場ハール・サントラル（レ・アール）がついに実現したのだ。白亜の大楼館、まことにもつてしかり。夢のようではないか。

こうして市場建設としては、かつて類を見ない大がかりなものであっただけに、竣工式は盛大であった。一〇〇〇発の花火と楽隊、築地の町は祭にわいた。卸売人売場に設けた祭壇の前に集う招待者の数一〇〇〇人余。日枝神社斎宮伶人の雅楽、斎王の

明治官僚が憧れた花の都パリの中央市場ハール・サントラルがついに実現

祝詞奏上が朗々と流れるおごかな式典ののちは東京市市長式辞、大臣閣僚の祝辞が続ぎ、大祝宴に入った。天窓から降り注ぐ陽光、見上げれば鉄骨が縦横に走り、まさに一〇〇年市場を約束する晴れやかな祝祭日であった。

一九三五年二月一〇日。いよいよ開業日を迎える。築地市場は、現在、この日をもって開業日としている。

翌一日。業務開始。

京橋の青物市場、通称大根河岸持丸商店の奉公人大木健二（築地青果物部仲卸大祐創業者）は、この日の思い出を書き残している。

△大根河岸から築地市場への引越しを記念する移転式典が行われたのは昭和一〇年二月一日。京橋組と赤羽、神田からの新規募集組を加えた仲卸二四〇軒の従業員らが参加し、楽隊を先頭に銀座通りを練り歩きました。ちょうど紀元節の日だったので、それはもう派手なものでした。「大木健二の洋菜ものがたり」▽

ところが竣工式や開業式、あの晴れがましき席に魚市場の人々の姿はなかった。彼らは、暫定市場でいつも通りに営業していた。組合の議事録「東京魚市場組合彙報」にも両日のことは、ただの一行も記されてない。まったく無視。いったいぜんたい、どうして……。

竣工式や開業式、あの晴れがましき席に魚市場の人々の姿はなかった

■いまだ水産物部の入場なし。
真の開場は道半ば

魚市場組合トップとなった田口は、一九三二（昭和七）年、組合彙報の巻頭言にこう記した。

△今や、中央卸売市場の開設を眼前にし、私どもは数百年伝来の歴史ある家業を擁して、前古未曾有の取引革命に身を投ぜんとしているのであります▽

徳川家康に従い、摂津の国から江戸に下った漁師らが、幕府に納めて残った魚の市中販売を許されたのは、家康が征夷大將軍となった直後。やがて幕府への納魚制度のもと、日本橋の魚市場は権威ある株仲間へと成長していく。ちなみに魚河岸は江戸っ子の巣窟のようにいわれるが、ルーツは摂津大阪であり、その後も魚河岸の繁栄を知るに及んで堺、尾張、京都伏見ほか地方からやってきた魚商人が築いた市場。今の仲卸に、「堺」だの尾張の「尾」、京都伏見の「伏」を屋号の一字に使う店が散見できるのはその名残だ。

農商務省は中央卸売市場の制度に順じて問屋、仲買の職能分離などを命じたが、東京市はそれには手を付けなかった

幕府崩壊後、株仲間は組合と名を変えたものの、営業鑑札の実権を握り、だれをも関与させない問屋集団として歩んできた。築地の暫定市場に移っても。芝浦から築地に移るおり、農商務省は中央卸売市場の制度に順じて問屋、仲買の職能分離などを命じたが、東京市はそれには手を付けなかった。東京市の管理下に入ったといっても、

依然、運営の実権は組合にあり、「雑然タル集団」と行政側にこきおろされた集団のままであった。

いよいよ、そこにメスを入れる時がきた。「雑然タル集団」の機構整備。組合側にとつては、江戸開府以来の歴史を持つ家業の解体と統合。まさに魚河岸の歴史を塗り替える革命である。竣工式はボイコット、開業日にも姿を見せなかったのは、この一大事業が重く大きな問題としてのしかかっていたからだ。

二月一〇日の開業日以降、青果物部は業者で埋まり、水産物部は川魚商がころうじて入場。しかし、広大なスペースは人まばら。真の築地市場開業は、いまだ道半ばであった。

■中央卸売市場の悲願、 市場機構改革の手法とは

現在、水産物部の卸売会社は七社。戦前は一社であった。

問屋や仲買が群れ集う組織を解体して一社に統合。流通の風通しをよくし、物価調整をはかることは、中央卸売市場最大の悲願であった

問屋や仲買が群れ集う組織を解体して一社に統合。流通の風通しをよくし、物価調整をはかることは、中央卸売市場最大の悲願であった。しかし、その達成には、開業まもない中央卸売市場のボイコットという不祥事まで起こす大問題となり、「重複問題」と人は呼んだ。卸売会社を一社（単一）にするか、はたまた複数か。新たな機構

の決着には、大きな犠牲が払われた。

組合は当初、一社入場を望んだ。しかし、二社の卸売会社でスタートする。いつばう行政側は、複数の姿勢をとっていたが、土壇場で豹変、強制的に卸売会社一社にしてしまう。なぜ、このようなねじれを生んだのか。

組合が単一を希望した歴史は、明治時代にさかのぼる。収拾のつかない移転抗争、問屋乱立による過当競争、こうした苦境を一新するため、一九二一（明治四十四）年、政府や東京府、市に「魚市場市営に関する請願書」を提出したことがある。請願内容は全九条。市場法の制定、市営市場建設のほか、「現在の業者をもつて魚市場を法人組合もしくは株式会社とし、類似営業は禁止すること」の一条を示した。全部の問屋業者が一つの会社に合同結集、強い問屋組織をつくり、独占的市場であり続けることを望んだ。請願書を受けて、一時は「二地区一市場一業者の原則」を盛り込んだ「魚市場法」制定の動きもあったが、日の目を見ることはなかった。しかしこのときから彼らに単一が精神が刻みこまれた。

そして一九二三年「中央卸売市場法」公布。

この法律は、魚市場法がベースになったといわれるが、卸売人の数ははっきりとうたっていない。

「開設者ハ業務規程ヲ以テ卸売ノ業務ヲ為ス者ノ員数ヲ制限スルコトヲ得」

要するに単複どちらでもかまわない。全国にできる中央卸売市場、それぞれの実情

「中央卸売市場法」では、卸売人の数は決めていなかった

に合わせて決めたらいい、という立場だった。

一九二八年、組合は、単一の卸売会社として入場することを発表。田口、安倍の両輪に、もっとも拍車がかかった時期だった。安倍は説明書や要綱を作り、会議では反対意見に対してすきのないように気を配りながら説明する。人の心をつかむのがうまい田口が意見を集約していく。ふたりの個性がみごとにかみ合い、単一へ導かれたといつてよい。

魚市場組合の考えた単一制の利点

① 単一制の利点を組合は、次のように考えた。

法の目的は、食料品市場の統制と物価調整にあり、単一制はこの目的にもっともふさわしい。

② 健全なる自由競争をうながす。

法はセリ売りが原則であり、卸売人は差益商人ではなく、手数料商人であり、独占暴利をむさぼることはない。さらに生鮮食品の場合、買占めなどによる価格調整は不可能である。

③ 荷主争奪による不正競争を避けることになる。

④ 通信費、人件費、接待費、集荷費用ほか、冗費の節約。

⑤ 相場の確立が容易。

これにより、消費者は小売値段との対照が容易になり、小売商人の暴利を抑制

し、物価調節の基礎を確立できる。

⑥ ひとつの自治団体であり、管理が容易。

制度の実行、報告の伝達、報告統計の蒐集、衛生問題などすべてにわたって迅速に対応できる。

こうした理論を組み立てることは、安倍がもつとも得意とするところ。あちこちで演説会を開き、執筆したが、結果、命まで狙われることになる。

さて、単一の方針が決まれば、いよいよ会社設立の準備だ。社名、資本金、役員構成、事業計画……。

なかでも特異なのは、資本金の構成についてで、現物出資という方法がとられた。現物出資については、国会で中央卸売市場法を審議するさいも盛んに意見が交換されており、主旨は資本金を工面できない零細な問屋の救済策だった。

魚問屋の現物出資。

イメージしにくいのが、現物とは、問屋の老舗料。営業権ともいえるし、暖簾料、ブランド力とを考えてもいいだろう。各業者の取扱高、営業年数、経歴、信用度などを総合査定し、カネに換算、出資金とするのだ。

しかも査定は、組合自身で行う。早い話、選ばれた組合員が仲間の査定の権限を持ち、老舗料を決めるのだ。なにやら、ひと悶着起きそうなやり方ではないか。

さらに行政側からすれば、弱者救済とはいいいながら、老舗料を会社に出資するとい

卸売会社設立のための資本金は
現物出資という方法がとられた

う形をとらせることで、もろもろの補償問題もかたがつく。市場の管理運営など、組合側にこれまであった権利を老舗料に集約させることで、莫大な額になるであろう補償問題からまぬがれる。中央卸売市場法の悲願の目的である取引の合理化、すなわち

「雑然タル問屋集団」の解体統合を、懷を痛めることなく、老舗料でクリアできるのだ。

なんと巧妙な手段。安い買い物であったか。

安い買い物だったという理由は、ほかにもある。市場は、市場人のスキルとノウハウで成立する。それがなければ、やっていけない。もつとも価値あるもの、私はそう思っている。当時は問題にしていけないが、そんな大きな財産まで、老舗料の名目で得ることができたのだ。

案の定、いざ、老舗料査定の問題に入ると、組合は割れた。老舗料査定に対して、役員のひとりが「インチキだ」と発言したのである。インチキ、たしかに言いえて妙。しかし、単一路の人々に、インチキ発言は無礼千万、不屈きな造反意見にしか聞こえなかった。

■卸売会社は一社か複数か。

世論をまきこみ、割れた中央卸売市場

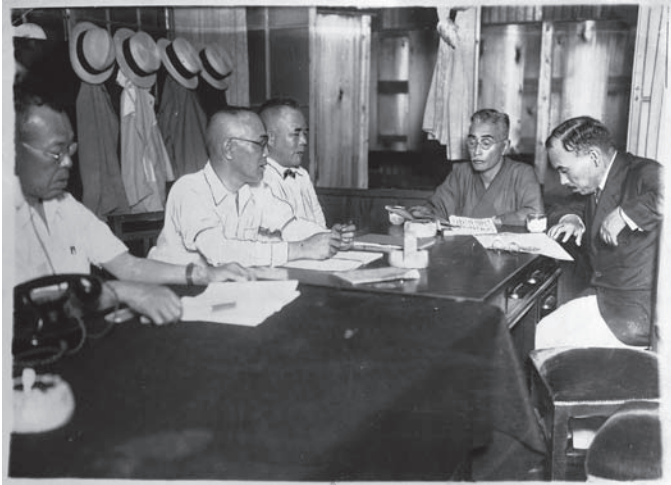
こうして組合は二つに割れ、二つの会社が誕生した。

単一か、複数か、両社の抗争が始まった

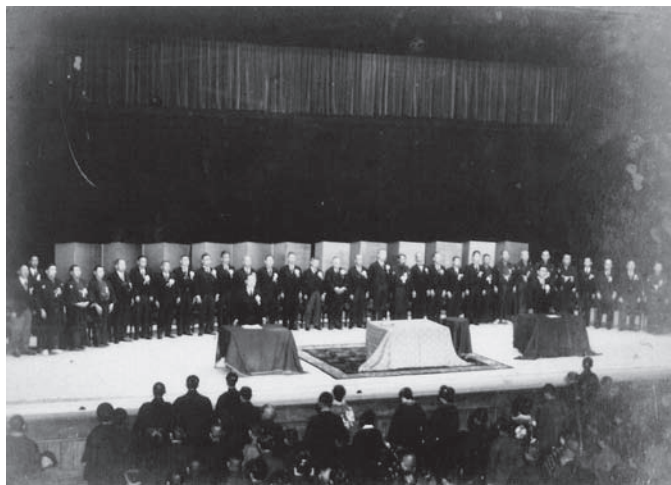
●東京魚市場株式会社 取締役社長 田口達三 資本金二七五〇万円
●東京魚問屋株式会社 専務取締役 伊勢丑松 資本金五五〇万円
田口ら単一派の会社「東京魚市場株式会社」に反旗をひるがえした人たちの会社「東京魚問屋会社」は、以後、複数派と呼ばれることになる。仲買人も、魚市場会社傘下の「東京魚市場組合」、魚問屋会社傘下の「第一魚仲買組合」の二つができた。
単一か、複数か。複数の新市場でもいいと思うが、単一派はそれをあくまで阻止したい。ここに両社の抗争が始まった。

資本金の額からも想像できるように、人数的には単一派が圧倒的に多い。しかし、複数派には世論という大きな味方がついた。魚商組合、生産者団体、消費者代表の婦人団体などだ。魚商組合には、知略にたけた塩澤達三がいる。市場にとって手ごわいのが生産者だ。婦人団体も、市川房枝、神近市子、山田わから、そうそうたる活動家が顔をそろえた。いずれも卸売会社一社では独占企業になるとして反対する。生産者は、魚を安く買いたたかれるのを恐れてその弊害を説き、婦人団体は、独占だから自由に価格操作ができ、魚が高くなると心配した。双方の間に立って運動を指揮したが、塩澤達三だった。

こうした勢いに乗り、複数派は入場へ向けて猛烈な陳情を展開。安倍のもとには、市場のもめ事の仲裁役、佃政一家の子弟がやりを持って脅してきたというのだから、問題の紛糾ぶりが想像できるというものだ。



開場前後の主役脇役。右から東京中央卸売市場初代市場長荒木猛。ひとりおいて、東京魚市場会社社長田口達三。単一派の理論家安倍小治郎。



1935年12月23日。中央卸売市場開場となり、「東京魚市場組合」は解散。歌舞伎座で大勢の人を招き、盛大な解散式を行った。

建物もすでに完成。開設者すなわち東京市は卸売人の員数を決めなくてはいけない。市議会の意見も圧倒的に複数支持。時の市場長荒木猛の「単複いずれも可なり」の意見は、不見識として非難ごうごうだった。

開場ぎりぎりの一九三四（昭和九）年、卸売人の員数決定。青果部、魚類部ともに複数。魚類部は次の通りに決定した。

魚類部・・・魚類一般を扱う者 三人以内

川魚のみを取り扱う者 一人

一九三五年二月に青果部、川魚商が入場。

開場式から遅れること八か月の一〇月二三日、複数派の東京魚問屋株式会社、第一魚仲買組合が業務開始。

翌三六年一月一六日、単数派の東京魚市場会社、魚市場組合が業務開始。

青果部が入場して一年後、やっと場内は業者で埋まった

青果部が入場して一年近く、やっと場内は業者で埋まった。この日が、名実ともに築地市場の開場日といっていいだろう。

■市場史最大の汚点、

複数派支援者の不買運動

こうして新市場にセリの声が響き、活気ある風景が見られるようになった。しかし、

それは過酷すぎる条件あつてのことだった。

実は、監督庁の商工省は、複数の入場に反対だった。商工省の意を受けて、東京市は入場前に合併の話を両社に持ちかけたが、物別れに終わり、とりあえず両社を入場させたのだった。商工省は希望条件としてひとこと添えた。

「若シ二人以上ノ卸売人トシテ収容スルノ已ムヲ得ザル場合ニ於テハ収容後可及的速ヤカニ、之ヲ単一ナラシムル様致スベキ」

二社を入場させておきながら、できるだけ早く合併させよとは、無茶すぎる通達だが、商工省はことさら単一制に固執したのだった。そこで東京市は入場後の両社に再び合併を言い渡す。

予定期日は、一九三六年四月。しかし、期日を過ぎてもまとまらない。荒木市場長に批判が集まる。市会で「単複いずれも可」発言のあった人だ。市場のことに精通、開場のために粉骨碎身の働きを示した人だが、単一目的達成の前には邪魔な存在。荒木市場長を更迭。かわりに単一強硬論者の近新三郎助役を市場長に据える。

近市場長は、まさかの手段に出た。両社に、六月末日までに株主総会を開いて、合併の決議をするように命じ、応じなければ業務許可の取り消し、または停止処分に出した。単一派の魚市場会社は吸収合併するくらいの気持ちだから、合併の決議を出した。しかし魚問屋会社は総会決議を延期。その間、塩澤達三率いる鮮魚買出人連盟を先頭に、婦人団体などの複数派支援者が猛烈な合併反対運動を展開し始めた。

卸売会社二社で入場したにもかかわらず、合併を命じられる

そんな運動を無視するかのようになり、ついに魚問屋会社に対し、八月一五日〜九月三日まで一か月間の業務停止命令が出た。

いきり立つ支援者たち。鮮魚買出人連盟は、複数制維持について声明書、続いて陳情書を出した。そこに記した納得できない理由は、次のようなものだった。

「卸売人ノ単一化ガ国家ノ方針ナリトスレバ合併ヲ強要スルニ先達チ法律ヲ改正スベキデアリ業務規程ノ変更ヲ命ズルコソ當然ノ措置ニシテ国民ノ向フ所ヲ示ス所以ト相信ジ申候

然ルニ當局ハカカル舉ニ出デザルノミナラズ青果卸売人ニ対シテハ何等ノ干涉ヲ試ミズ徒ラニ魚類部ノ卸売人ノミニ合併ヲ強要シ又東京六百萬市民サテハ全国一千万ノ漁民ノ要望ヲ斥ケテマデ単一化サザルベカラザル理由何レニアリヤ誠ニ諒解ニ苦シム所ニ御座候」

中央卸売市場法は、開設者の業務規程により員数を決めよ、とあり、東京市会は卸売人複数の業務規程を満場一致で可決。現況、二社で順調にやっているではないか。もし国家の方針で単一にすべきというなら、まず法律を改正すべき。さらに青果部は二社のままにしておき、なぜ魚類部だけ一社にせよというのか、まったく理解に苦しむ、と告げたのだった。

まことその通りであり、魚問屋会社が合併決議を引きのばしたのもそこにあった。しかし国家の方針にゆるぎはなく、支援団体はついに不買同盟を結ぶ。

国家の方針で単一にすべきというなら、まず法律を改正すべき

このときの魚問屋会社傘下の第一魚仲買人組合の決議文は悲壮だ。

「本組合員ハ今日東京魚問屋株式会社ノ業務停止ニ際シ運命ヲ共ニシ本日一五日ヨリ九月一二日迄休業ヲ為ス」

そして九月二日より、築地市場の不買運動が始まった。

不買に入ったのは、東京魚商業組合、東京府魚商組合、大東京料理飲食業組合同盟など八団体。この日のために準備した自動車三〇〇台に分乗、横浜、千住、大森の市場で買い出しを行った。さらに産地荷主に三市場への出荷を要請。意気盛んなどころを見せた。

婦人団体は、全国鮮魚買出人組合とともに「東京魚市場不買市民大会」を開催

市川房枝たち婦人団体は、全国鮮魚買出人組合とともに「東京魚市場不買市民大会」を開催。

「我等ハ茲ニ所期ノ目的ヲ貫徹スベキ決死的闘争ヲ期ス」と決議文を読み上げた。また三〇万枚のチラシを市内各所で配布。

「私共消費者はこのたびの不買同盟に対して魚屋さんに味方して東京の市場の魚は買わないことにしましょう。」

魚を買う時には、不買同盟の魚屋さんかどうかをただして魚を買いましょう。もし不買参加の魚屋さんが来ないときには三日四日魚ヌキにしてもいいだけの覚悟を持ちましょう」

もちろん東京市や魚市場会社も応戦。不買運動前日には消費者向けの数万枚のチ

シを配布する。

「本市としては、万一にも買出人の一部が理由なき不買を決行し、消費者たる市民各位に対し迷惑を及ぼすことありとせば誠に遺憾に思いますが、左様な事態が起こったならば、市民各位は暫くの間不便を御しのび下さって、中央卸売市場築地本場の偉容を御見学方々新鮮なる魚類の購買にどしどし来場せられんことを希望するものであります」

一般来場を呼びかけることなくのんびりした内容。実は東京市は不買運動など数日もしたら終わるだろう、と思っていた。

不買運動は一週間たっても一〇日を経ても終わることはなかった

しかし一週間たっても一〇日を経ても終わることはなかった。さまざまな声明文、決議文、陳情書が飛び交う。デマが流れる。

不買運動三週目に、市議会に議員から決議文が提出された。

「市理事者は市会の決議趣旨に反し、卸売人の合併を強要せんとするは不当と認む。業務停止命令をすみやかに解除し、市民のために善処せよ」

この決議文に対して議員七三名が賛成署名。しかし、無記名投票で採決すると四三対四四票で否決。「単一は国家の方針」一点張りの牛塚市長の首はつながつた。

夏のうだる暑さのなか、いつ果てるともしれない消耗戦であった。魚市場会社は営業を続けるも、売れないから冷蔵庫は満杯。傘下の仲買人も商売にならない。魚問屋会社は、社員や仲買人への生活資金の工面に四苦八苦。買出し人はなれない土地での

仕入れに疲れていた。誰も得することのない戦い。損失は一三〇万円と、新聞が書きたてる。今の数億円に匹敵する額だ。

こうして戦いが末期的症状を帯びてきた一〇月十五日。ついに調停が成立。商工省や東京府、市、両会社と仲買人代表、買出し人代表と争議の主役やら脇役が両国福井楼に参集、古式ゆかしく手締めを打ち、四〇日以上にわたる不買争議に終わりを告げた。

不買争議終結後、商工省が提示した約束通り、魚問屋会社は合併に調印

不買争議終結後、商工省が提示した約束通り、魚問屋会社は合併に調印。さらに魚市場会社は東京淡水魚会社、東京海産物会社をも合併。一九三九年、商工省の思惑通りの強大な卸売会社が出来た。

この争議、哀れをきわめたのは魚問屋会社で、支援団体に振り回され、合併時には矢折れ刀尽きた状態だった。それでは魚市場会社は無傷であったかといえはそうでもなく、社長についた田口が商法違反の罪で警察に五か月間も拘留された。実際の罪状はないに等しく、単一に反対する市民感情をなだめるためのスケープゴートにしか見えない。これもまた単一制樹立のための犠牲者といえようか。

■すべてはあの大きな戦争に。
単複問題の向こうに。

なぜ、こうまでして商工省は単一にこだわったのか。単一でなくてはならなかったのか。

時代の、あるうねりのなかにその答えが見えてくる、私はそう思えてならない。

一九三一年・満州事変が始まる

一九三二年・日中両軍が衝突した上海事変。満州国建国宣言。青年将校らが、犬養

毅首相を暗殺（五・一五事件）。

一九三三年・国際連盟脱退。関東防空大演習の実施

日本は、戦争に向かっていった。

単数派の魚市場会社が築地市場に入場したのは一九三六年一月であったが、翌月には戦争へ向かう決定的な事件が起きている。皇道派青年将校らが中心になって拳兵、永田町一帯を占拠した二・二六事件だ。市内が戒厳令になる前、市民の誰より早くにこの事件を知った市場の人々は、実は自分たちの抗争が、このただならぬ異変に関係していることに気づいていただろうか。

二・二六事件を機に政治経済の主導権は軍部が手にする。

商工省の役割は、戦争に向けて、統制を強化すること。食糧配給のパイプは、より

商工省の役割は、戦争に向けて、統制を強化すること。食糧配給のパイプは、より太く一本化する。早くから単一制に固執したのは、そこにあつた

太く一本化することが望ましい。早くから単一制に固執したのは、そこにあつた。

安倍は戦時中、その著書「生鮮食糧統制の研究」のなかで、中央卸売市場の歴史的意義として、こう記している。

「自由主義経済華やかな時代に、法規によつて取引を規制するが如き、統制的市場を実現したことは、市場史上特筆すべき」であり、「自由主義経済の崩壊期に際して、都市における生鮮食糧配給上、幾多の成果を収め、重要な任務を果たした点を認めなければならぬ。」

大正デモクラシーのなか、不安定な物価にあえぐ市民のために考えられた中央卸売市場。社会事業の一環として始まった中央卸売市場は、いつのまにか戦争遂行の手段にすり替わっていた。

戦争が視野に入ったときから、国は単一をめざしていた。牛塚市長が、市会からの単一絶対反対の抗議に対して「国家の方針」で終始つっぱねたのも道理である。

単一の卸売会社が成立した一九三九年、日本はすでに日中戦争のただなかにあつた。前年には「戦争遂行のため、人的及び物的資源を統制運用」する「国家総動員法」発令。一九四一年、卸売会社は計画配給の荷受機関となり、セリによる評価機能を失った仲買人は職を失う。こうして国による末端消費者までの配給ルートができたその暮れに真珠湾攻撃、日本は太平洋戦争に突入する。

歴史の偶然だろうか。私には偶然とは思われない。

魚市場会社、魚問屋会社の人々すべて、結局は戦争に翻弄された犠牲者に思えてならない

食べなきや戦はできぬ、戦争遂行へ食糧確保は欠かせない。想定内の路線であった。独占的強大な卸売会社をつくっておけば、次なる配給会社に移行するのは造作がない。不買争議まで引き起こした不毛な消耗戦、重複問題とはなんだったのか。魚市場会社、魚問屋会社の人々すべて、結局は戦争に翻弄された犠牲者に思えてならない。

さらに本題からそれるが、重複闘争があまりにもすさまじかったためか、仲買人問題がおろそかにされたのも、私には残念に思える。卸売会社が株式会社となり、少数の大問屋は会社役員に、仲買権を持つ中小問屋は、その権利を使って仲買人に。さらに仲買専門業者も仲買人に。こうして一三〇〇もの仲買人が生まれた。卸売会社設立のように、きびしい員数規定がなされなかったのは、補償問題だった。右から左へ移行させることで、問題から逃れた。そしてできた強大な卸売会社と弱小な仲買人。仲買が仲卸と名を変えても、その構図は、今もつて続いている。はたしてあの時、仲買機構にもなんらかの手だてを講じていたら……。仲卸で働いていただけに、ふつとそんなことを考えてしまう。

ともあれ、かつて石原都知事が「汚い、危険、時代遅れ」と酷評した築地市場を、私がそれでも愛おしく思うのは、その誕生が生半可なものでなかったことが大きい。日本橋魚河岸時代、関東大震災、そして戦争、いくつもの荒波を乗り越えて生まれ、時代によって存在の解釈は捻じ曲げられたにせよ、モンスター市場としてあり続けた。

そのことを、誇らしくさえ思うのだ。

エピソード

二〇一四年、花曇りの四月、築地大橋が突如として海の向こうからやってきた。「造る」でもなく「できる」でもなく、やってきた、としか形容できない。なにしろ、橋は、日本一という巨大クレーン船に吊られてやってきたのだから。そして、築地市場の前を流れる隅田川に、長さ二四五メートル、幅六車線分の大きな橋が、たったの二日で架かってしまった。

この橋の先、二キロあまりのところに豊洲新市場がある。新市場用地では、来年の竣工に向けて工事が進んでいる。

築地移転が決まって以来、「築地ブランドはどうなるんだろう」。不安げな言葉をよく耳にしている。確かに、ツキジの名は、世界的なブランドとなっているらしい。橋を渡することは、ツキジブランドを失うことだ。

でも私は、ちつともこわくない。振り返ってきた歴史がその気持ちを後押しする。

日本橋から築地へ。魚河岸の人々は、日本橋ブランドをその地に残し、築地に移ってきた。江戸から営々と三〇〇年もかけて築いたブランドを。築地市場誕生は、日本橋ブランドとの決別であった。

そして、新たな市場誕生のなんと波乱に富んでいたことか。
こうしたことをすべてを乗り越えた人々がつくったブランドである、ツキジブランドは。そしてツキジブランドをこしらえた人たちが、共に豊洲新市場へ行こうとしている。

なにがこわいことだろう。豊洲ブランドはきっとできる。もっとすごいものが。それでききや、ウソ。歴史はそう語りかけている。(文中、敬称略)

参考資料及び引用文献

- 「東京都中央卸売市場史 上・下巻」東京都
- 「卸売市場制度五十年史 第一・二・三巻」卸売市場制度五十年史編さん委員会(社団法人食品需給研究センター)
- 「中央卸売市場機能論」秋元博(市場経済研究社)
- 「日本橋魚市場ニ關スル調査摘録」東京市役所
- 「魚市場の現在未來」全国重要魚市場聯合會
- 「市場の語る日本の近代」中村勝(そしえて)
- 「近代日本市場史の研究」原田政美(そしえて)
- 「市場の問題」荒木猛(東京中央市場新聞社)
- 「明治の東京計画」藤森照信(岩波書店)
- 「都市をつくった巨匠たち」財団法人都市みらい推進機構(ぎょうせい)

- 「値段史年表」週刊朝日(朝日新聞社)
- 「日本橋魚市場沿革紀要 上・中・下巻」川合忠平衛(川井新之助)
- 「明治漁業開拓史」二野瓶徳夫(平凡社)
- 「風俗江戸東京物語」岡本綺堂(河出書房)
- 「築地警察署史」築地警察署史編集委員会(警視庁築地警察署)
- 「魚争議誌史」小島亀吉(東京府魚商組合)
- 「市川房枝自伝・戦前編」市川房枝(新宿書房)
- 「魚河岸百年」魚河岸百年編纂委員会(日刊食料新聞社)
- 「日本橋魚河岸物語」尾村幸三郎(青蛙房)
- 「欧米魚市場視記」小網源太郎
- 「魚河岸盛衰記」田口達三(いさな書房)
- 「さかな一代」安倍小治郎(魚市場銀鱗会)
- 「生鮮食糧統制の研究」安倍小治郎(水産経済研究所)
- 「大木健二の洋菜ものがたり」大木健二(日本デシマル)
- 「東京都中央卸売市場水産物関係沿革資料」水産物市場改善協会
- 「東京魚市場組合彙報第十二〜十九号」東京魚市場組合事務所
- 「月刊東卸一八三号」東京魚市場卸協同組合
- 「銀鱗六〇号、七八号」銀鱗会

●写真は筆者提供



2015年3月。5街区青果棟の骨組は、ほぼ出来上がっていた。



2014年4月、築地と勝どきを結ぶ築地大橋の橋げたをかける工事がおこなわれた。



市場を分断する道路、環状2号線にかかる豊洲大橋もすでに完成。



都心と豊洲市場の重要なアクセスとなる環状2号線、築地大橋は大きな役割をになう。

時事余聞

◇…庭の横に今梅花が咲いている。花自体は確かに美しい。真冬の寒さに耐え抜いて咲き誇っているだけに毅然たる姿は見事である。このあとに訪れる桜も立派であるが、梅の気概や品格は格別である。梅といえは水戸の偕楽園が良く知られている。孟子の言葉に「古の人は民と偕に楽しむ、故に能く楽しむなり」とある。君主は楽しむを独占せず、民とともに楽しむべきであるという。水戸の「偕楽園」の命名はこれにちなむもの。

◇…中国で花といえは梅や桃を指す。そこで高啓の八行詩、「梅花」が名高い。「けい窓只まきに瑤台に在るべし／誰か江南に向つて処々に栽えたる／雪満ちて山中高士臥し／月明らかにして林下美人来る…」。意識すれば玉のように美しい梅の姿は、仙人の住む高殿にあるべきなのに誰が江南の処どころに植えたのであろう。雪が積った山中に高士が寝ているように気高く、月が明るく輝いているときは林下に美人が立っているように美しい、と続く。最後に春風の吹く

頃には寂しそうに毎年花を咲かせている、という。この詩は歴史の中に梅をとらえようとしたものである。

◇…梅花の季節とは裏腹に創業者一族の内部騒動で頭を痛めている企業もある。大塚家具の役員人事では新聞に何度も報じられ内紛がいつ収束されるか見通しがつかない。一九六九年三月に創業。大塚勝久氏が当初から社長を務めてきたが、二〇〇九年三月に長女の大塚久美子さんが社長となり、勝久氏が会長に。この交代劇の理由にはつきりしないが、表向きは売上低下を脱却し、成長を期待されたと思われる。コスト削減により黒字になったが、売上高は以前と変わらず五五〇億円前後を推移した。◇…しかし、突然二〇一四年七月に久美子社長は解任された。無役の取締役への降格であった。二〇一五年一月に再び大塚久美子さんが社長に復帰。勝久氏は会長となる。取締役の顔ぶれが変わり娘婿の佐野春生氏、久美子さん側に寝返った結果、役員票決数が逆転したといわれる。大塚家具の内紛は簡単にはおさまりうもない様相を濃くした。(K)

編集後記

現在の築地市場は大きな困難に出会いながらそれを一つ一つ乗り越え、築地ブランドを築き上げた。その難局は本稿に語られているが、標題の通り「築地市場」の開場物語は極めて平易に分かりやすく、繊細な感覚で語られている。確かに築地市場は世界一の魚市場で、魚種の多様性や取扱高は圧倒的である。日本橋からの移転以来の物語が今度は場所を改め「豊洲市場物語」の第一頁が開かれることになる。筆者のご尽力に敬意を表するとともに心から御礼申し上げます。

「水産振興」 第五六七号

平成二十七年三月一日発行

(非売品)

編集兼 井上恒夫

発行所

〒104-0055 東京都中央区豊海町五番一
豊海センタービル七階

一般財団法人 東京水産振興会
電話 〇三 三五三三八 一一一
FAX 〇三 三五三三八 二一六

印刷所 (株)連合印刷センター

(本稿記事の無断転載を禁じます)

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL <http://www.suisan-shinkou.or.jp/>

平成二十七年三月一日発行（毎月一回一日発行）五六七号（第四十九卷三号）